

石巻市文化財調査報告書第12集

梨木畠貝塚

—(主)石巻鮎川線祝田道路改良工事に伴う発掘調査報告書—

2004年

石巻市教育委員会
宮城県石巻土木事務所

正誤表

*2頁 遺跡名称を次のように変更します。 №50 竹の花遺跡 → 小沢貝塚

*本文掲載由の旨側にて、次の2点を加えることとします。



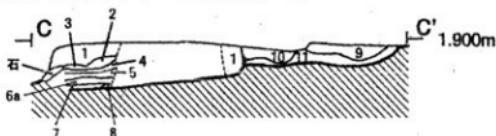
*17頁 B トレンチ出土人骨出土状況及び土器集中地点のスケールを下図のように加えます



*17頁 Bトレンチ人骨出土状況のスケールを下図のように加えます。



*22頁 C-H' ラインの土層断面図の土層Noを下記のとおり修正します。



*32頁 Cトレンチ出土骨角器観察表No.14を下記のとおり修正します。

14	鹿	24.0	3.1	1.9	(63.10)	鹿角	12-11
----	---	------	-----	-----	---------	----	-------

*図版2市道敷設に伴う調査地点写真(下段4コマ)タイトルを下記のとおり修正します。

北側トレンチ → 南側トレンチ(B区)

南側トレンチ ⇒ 主側トレンチ(A区)

北側トレンチ断面 二 東側トレンチ断面

東側トリ心透断面 二 東側トリ心透断面

梨木畑貝塚

—(主)石巻鮎川線祝田道路改良工事に伴う発掘調査報告書—

序 文

梨木畠貝塚は、これまでにも幾度かの発掘調査がなされ、石巻市内で最も古い時期の遺物が出土しており、当地域の原始時代を知る上でも重要な遺跡です。

また、この縄文時代早期の土器は、形態的な特徴をもとに「梨木畠式」という土器の型式設定がなされている学史的にも著名な遺跡です。

昭和51年に行った当教育委員会の発掘調査では、埋葬人骨を検出しており、出土遺物の土師器・須恵器・製塙土器などから平安時代のものと考えられています。

平成14年度は梨木畠貝塚の範囲内の2地点で発掘調査を行いました。ひとつは梨木畠3号沢砂防ダム工事に伴うもので、縄文土器の包含層と平安時代の堅穴住居跡2軒などが検出されました。そして本報告書は、もうひとつの調査である県道石巻鮎川線道路改良工事に伴う発掘調査の成果をまとめたものです。

梨木畠貝塚は、これまでの調査で縄文・弥生時代および平安時代の遺構・遺物が確認されていましたが、平成14年度の2地点から新たに古墳時代のものと考えられる統縄文土器が確認されました。この度の調査成果が多くの方々に活用され、地域の歴史解明の一助となれば幸いです。

最後に、梨木畠貝塚発掘調査にあたり、特段のご配慮を賜り、御協力いただきました方々と関係機関に、心から厚くお礼申し上げます。

平成16年3月

石巻市教育委員会

教育長 阿 部 和 夫

目 次

I. 発掘調査に至る経緯	1
II. 遺跡の立地と周辺の環境	1
III. 基本層位	5
IV. 発見された遺構と遺物	8
V. Bトレンチ出土の人骨について	33
VI. まとめ	45
引用・参考文献	46

写真図版

例 言

1. 本書は、宮城県石巻土木事務所による、県道鮎川祝田線改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査の成果を収録したものである。
2. 発掘調査成果については、現地説明会資料等によって報告されているが、内容は当報告書が優先する。
3. 調査は、石巻市教育委員会が主体となり、石巻市教育委員会 社会教育課 文化係が実施した。
4. 土層等の色調標記については、「新版標準上色帳」9版（小山・竹原：1989.5、日本色研株式会社）を利用した。
5. 本書の第1図は国土交通省国土地理院発行1/50,000「石巻」を複製して使用した。
6. 本書の編集、執筆については、石巻市教育委員会 社会教育課 芳賀英実が担当し、遺物尖端およびトレースは、芳賀・木暮亮・今野勝成（嘱託職員）が行った。
7. 出土した遺物および調査記録類は、石巻市教育委員会で保管している。

調 査 要 項

1. 遺 跡 名 梨木畠貝塚（なしきはたかいづか）
2. 所 在 地 石巻市渡波字梨木畠
3. 調 査 期 間 [発掘調査] 平成14年5月20日～平成14年11月22日まで
[整理作業] 平成15年4月23日～平成16年3月15日まで
4. 調 査 員 石巻市教育委員会 社会教育課 芳賀英実・古澤亜希子・今野勝成（嘱託職員）
5. 調査補助員 [発掘調査] 相澤敏郎・岡千恵・小山幸子・小畠由紀子・
穂田吉夫・斎藤初弥・斎藤よし子・樋部和夫・
[整理作業] 岡千恵・葛西ふみ・志小田まり子・茂木希巳江
6. 調 査 指 導 宮城県教育庁文化財保護課
7. 調 査 協 力 発掘調査並びに報告書作成にあたっては、次の方々並びに機関から指導・協力をいただいた。ここに記して感謝の意を表します。（敬称略・順不同）
官城県教育庁文化財保護課 後藤秀一・佐久間光平、多賀城市埋蔵文化財センター 相澤清利、鳴瀬町奥松島郷文村歴史資料館 菅原弘樹、東北大学大学院医学系研究科 人体構造学講座 百々幸雄、東北大学理学部 松本秀明、石巻文化センター 古澤亜希子ほか、

I. 発掘調査に至る経緯

平成7年1月に祝田道路改良工事と埋蔵文化財との関わりについて、宮城県石巻土木事務所から協議があり、さらに、3月にサン・ファンパークアクセス道路建設と埋蔵文化財との関わりについて、石巻市企画部慶長遣欧使節船対策室から協議があった。

これらの協議があった道路建設および道路改良は、近接していることから4月に現地において、宮城県文化財保護課と石巻市教育委員会及び事業者で協議を行った。協議の結果、サン・ファンパークアクセス道路建設予定地は採石場があったところではあるが、梨木畠貝塚の範囲内であることがら、確認調査を行うことになった。

サン・ファンパークアクセス道路建設地点の確認調査は平成7年6月12日から6月23日まで行った。調査の結果、採石場があったところは、地表から約30cmのところで岩盤になっていたところや後世の搅乱によって地山が削られていた。また、県道の近くを調査したところ地表から約2mの地点で旧表土と思われる黒色土を確認し、その下層で細かく碎けた貝殻をわずかに確認したが、その他の遺構・遺物は検出されなかったので、道路工事によって遺跡が破壊されることないと判断し調査を終了した。

祝田道路改良工事地点の確認調査については、平成7年7月10日から8月31日まで行った。調査は南北をA区とB区に分け、A区は幅約5m、長さ約25mを調査し、ピットや縄文土器を検出した。B区は幅約5m、長さ約15mを調査し、縄文時代晚期や奈良・平安時代と思われる住居跡と縄文時代前期・晚期の土器や弥生土器、奈良・平安時代の土師器・須恵器などが検出されたが、計画変更がむずかしいことから記録保存を行った。

次に、平成11年7月に県道石巻鮎川線道路改良計画と埋蔵文化財との関わりについて、宮城県石巻土木事務所より協議があり、平成11年8月に宮城県文化財保護課と石巻市教育委員会、宮城県石巻土木事務所の三者で協議を行った。協議の結果、道路建設予定地には、過去の調査等で遺構・遺物が検出されると考えられることから、確認調査を行うことになった。

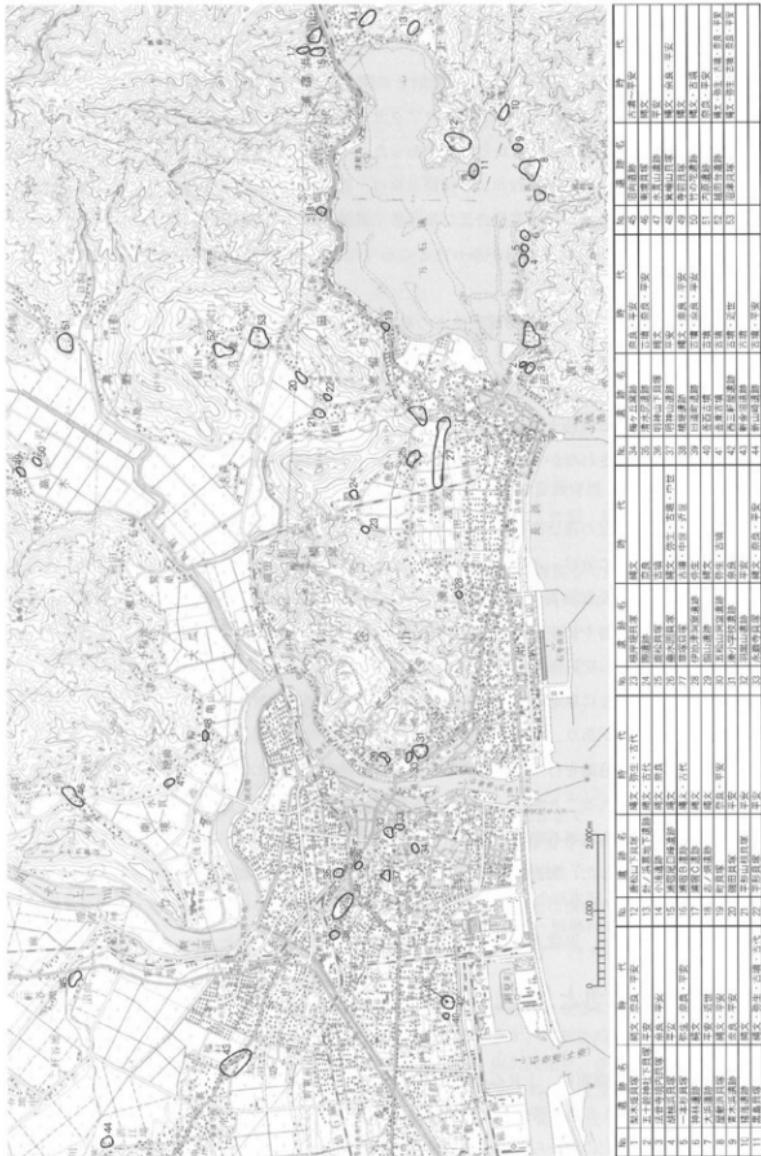
平成12年5月に、宮城県石巻土木事務所から埋蔵文化財発掘の通知があり、平成14年5月20日から確認調査を開始した。調査の結果、奈良・平安時代の住居跡や製塙遺構、土壤などのほか、人骨や縄文土器、古墳時代前期の土師器、奈良・平安時代の土器などが検出されたので、事前調査として遺跡の記録保存を行い、平成14年11月22日で発掘調査を終了した。

II. 遺跡の立地と周辺の環境

1. 遺跡の立地

梨木畠貝塚は石巻市の南西部、JR石巻線渡波駅の東南約1.3kmに位置し、万石浦南岸の湾口に近い丘陵上の標高約1~1.6mの緩やかな傾斜地に立地する。

万石浦は、周囲を北上山地から続く山々が取り囲んでおり、本遺跡も北は万石浦に面し、南には大



第1図 遺跡の位置と周辺の遺跡

第2図 梨木畠貝塚調査地点



六天山から連なる尾根を背負っている。万石浦に面した入江や丘陵上には、縄文時代から奈良・平安時代までの数々の遺跡が存在する。

梨木畑貝塚周辺は宅地化されている部分が多く、また、今回の調査地点がある斜面を西に登りつめると、本来は尾根であった部分から西側は、採石作業により大きく削られ、原地形を留めていない。

2. 歴史的環境

石巻市内の遺跡の中でも、最も古い時期に形成されたのがこの梨木畑貝塚である。万石浦沿岸には隣接する女川町にかけて縄文時代の遺跡が集中しており、本遺跡から東へ約2kmにある屋敷浜貝塚や、神林遺跡、志ノ畠遺跡、女川町の猪落遺跡、尾田峰貝塚などがある。

一方、万石浦の北に位置する古糸井湾沿岸の丘陵でも、沼津貝塚、南境貝塚から縄文時代早期や前期の遺物が出土しており、早くから貝塚の形成が行われ、長期間に渡り人々の生活が営まれていた。また、牡鹿半島南西部に位置する田代島の仁斗田貝塚のように、離島に営まれた遺跡もある。

弥生時代は、沼津貝塚や五松山洞窟遺跡などから弥生土器等が見つかっているが、遺跡の数は極めて少なく、遺跡自体も小規模と推定されるものが多い。また、石巻市内の弥生時代の遺跡は、海に面した丘陵裾部の浜辺や海蝕洞窟などに立地するものが多く、万石浦周辺では本遺跡のほか、南岸の一本杉貝塚や女川町の唐松山下貝塚、黒島貝塚、北岸の垂水開貝塚がある。

古墳時代になると、仙台平野をはじめ各地では高塚古墳がつくられるが、石巻市周辺では極めて少なく、矢本町の小脇浦古墳が知られているに過ぎない。石巻市では西部の浜堤上に古墳時代後期の円墳と推定される釜西古墳・釜東古墳があるのみである。

古墳時代の遺跡は、市内西側の平野部に立地するものが多く、このうち田道町遺跡や新金沼遺跡では前期の集落跡が、新山崎遺跡では方形周溝墓が検出されている。一方、市内東部の万石浦周辺では鹿松貝塚、垂水匝貝塚、際遺跡、五松山洞窟遺跡、女川町の黒島貝塚などがある。五松山洞窟遺跡では古墳時代中期の埋葬人骨と金銅装大刀、衝角付胄などの副葬品が出土している。

奈良・平安時代の遺跡としては、銘帯金具や木簡が出土した田道町遺跡や、鍛冶工房跡と墨書き土器が出土した箕輪山貝塚などがある。万石浦周辺では、古墳時代には少なかった遺跡の数がこの時期に増加するが、その多くは貝層を伴い、製塩土器が出土している。梨木畑貝塚もその一つであり、周辺の五十鈴神社下貝塚、一本杉貝塚、大浜遺跡、青木浜遺跡などからも製塩土器が出土している。

中世以降の遺跡としては、石巻市内では館跡、寺院跡、経塚、生産遺跡、板碑群がある。遺跡の中で最も多いのは館跡で、糸井地区の水田を見下ろす丘陵上に集中している。万石浦周辺では、北岸の丘陵上の沢田日影山経塚や牧山丘陵東部の貉坂山に貉坂山経塚がある。また、貉坂山経塚から約200m西側の鹿妻山麓の微高地には専称寺跡があり、鎌倉時代から室町時代にかけての板碑群が見つかっている。

3. これまでの調査成果

梨木畑貝塚では、これまでに、昭和38年の東北大大学の調査をはじめとして、幾度かの調査が成さ

れてきた。

昭和 38 年には、東北大大学考古学研究室による調査が行われ、厚いハマグリの貝層の下からは、奈良・平安時代の土師器、須恵器、土錐、刀子、骨角器などが出土している。さらに、このハマグリの貝層の下からは、縄文時代早期の遺物を含む貝層が見つかっている。カキ、イシダタミなどの岩礁帯の貝類からなる縄文時代早期の貝層からは、底部尖底で器内面に貝殻条痕のある十器が出士し、この土器の形態的な特徴から「梨木畠式」という土器型式がつくられた。

次に、昭和 51 年に石巻市教育委員会が行った調査では、住宅地内の庭から埋葬人骨が検出された。宅地建設により既に約 1.5m 程の包含層が削平されていたが、残存したハマグリ、アサリ、カキを主体とした貝層からは、内黒で底部回転糸切の土師器や底部手持ちヘラ削りの須恵器坏のほか、須恵器の甕、長頸瓶、蓋、製塩土器などが出土している。埋葬人骨はこの貝層の最下部から検出され、屈曲姿勢を呈しており、埋葬頭位は北東であった。人骨の年代は、上記遺物から 9 世紀頃のものと考えられる。また、後の鑑定の結果、人骨は壮年の男性のものであることが判明した。

その後、平成 7 年に市道付設工事とサン・ファンパークアクセス道路建設に伴う調査を行い、市道付設地点では、縄文時代前期から弥生時代の土器が調査区西寄りの斜面から出土したほか、奈良・平安時代の土師器、須恵器が見つかっている。一方、サン・ファンパークアクセス道路部分では、遺構・遺物は検出されなかった。

平成 14 年には、今回報告する県道石巻鶴川線道路改良に伴う発掘調査の他に、梨木畠 3 号沢砂防ダム事業に伴う発掘調査が行われ、平安時代の住居跡 2 軒と縄文土器包含層を検出したことから、砂防ダムに伴う調査地点から平成 7 年の市道付設に伴う調査地点にかけて、遺構・遺物等が包含されている可能性が考えられる。

また、これまでの調査では、縄文・弥生・奈良・平安時代の遺構・遺物等は多数検出されているが、古墳時代の遺構・遺物等は検出されておらず、砂防ダムに伴う調査地点から、統縄文土器が検出されたことから、古墳時代の遺構・遺物等が包含されている可能性が考えられる。

III. 基本層位

本報告では、県道石巻鶴川線道路改良工事に伴う調査地点と平成 7 年に行った市道付設に伴う調査地点およびサンファンパークアクセス道路関連調査地点が未報告なのであわせて記載する。

平成 7 年の市道付設に伴う調査地点は、平成 14 年に行われた梨木畠 3 号沢砂防ダムに伴う調査地点の北西部約 50m のところに位置しており、堆積状況は類似している。サンファンパークアクセス道路関連調査地点は、更に約 20m 北西のところに位置している。県道石巻鶴川線道路改良工事に伴う調査地点は、梨木畠 3 号沢砂防ダムに伴う調査地点の北東部約 70m のところ（沢の反対側）に位置している。

サンファンパークアクセス道路関連調査地点

地表から30cmから2mほどで地山に至るが、30cmから1.5mまでは後世の掘削（攪乱）を受けていた。

市道付設に伴う調査地点

- 〔I 層〕 10YR 3/2 黒褐色土 調査区全体で確認されており、層厚は5～60cmである。5mm程の黄色粒および礫を比較的多く含んでいる。表土層であり、耕作による攪乱を受けている。
- 〔II 層〕 10YR 2/2 黒褐色土 断続的ではあるが調査区全体で確認されており、層厚は10～20cmである。10～20mm程の赤色礫および10～15cmの礫を含んでいる。
- 〔III 層〕 10YR 2/1 黒色土 南側トレンチで確認されており、層厚は20～30cmである。10～20mm程の赤色礫を含んでいる。また、繩文土器を含む包含層である。
- 〔IV 層〕 10YR 4/2 灰黄褐色土 北側トレンチの上部から中央部にかけて確認されており、層厚は14～18cmである。礫を多く含んでいる。
- 〔V 層〕 10YR 2/2 黒褐色土 南側トレンチ中央部で確認されており、層厚は6～18cmである。5～40mm程の礫を含んでいる。また、黄色、赤色礫を若干含んでいる。
- 〔VI 層〕 10YR 3/4 暗褐色土 南側トレンチの北側で確認されており、層厚は10～20cmである。10～20mmの黄色礫を多く含み、5～10mmの赤色礫も含んでいる。

県道石巻鶴川線道路改良工事に伴う調査地点

調査地点には梨木畠3号沢が南北に入り込んでいる。沢の西側（Aトレンチ）は約2mの盛土が成されており、さらに50cm下から薄い貝層を確認したが、遺構・遺物は含んでいないことから自然堆積の貝殻と思われる。

これに対して沢の東側は、やはり約2mの盛土が成されているが、その下層からは、厚さ約10cm程の貝層や2～90cm程の礫層を確認した。貝層と礫層はBトレンチからCトレンチにかけて確認しており、これらの層から繩文時代から奈良・平安時代の遺構・遺物を検出した。基本層位は盛土より下層から記載することにした。

- 〔I 層〕 10YR 2/2 黒褐色シルト BトレンチとCトレンチで確認されており、層厚は5～20cmである。混土貝層であり、土器片や骨角器、炭化物等を含んでいる。
- 〔II 層〕 10YR 2/3 黒褐色シルト Bトレンチで確認されており、層厚は4～12cm程である。灰白色火山灰を多量に含んでおり、ハマグリなどの貝殻も含んでいる。
- 〔III 層〕 10YR 3/2 黒褐色シルト BトレンチとCトレンチで確認されており、層厚は5～20cmである。アサリ、ハマグリを主体とする混土貝層である。
- 〔IV 層〕 10YR 4/6 褐色シルト BトレンチとCトレンチで確認されており、層厚は2～90cmである。1.5～10cmの扁平な礫から成る層である。

〔V 層〕 10YR 3/2 黒褐色シルト Cトレンチ東端からDトレンチにかけて確認されており、層厚は20cm程である。2~5mmの明黄色礫を含んでいる。

〔VI 層〕 10YR 3/3 暗褐色粘質シルト Dトレンチで確認されており、層厚は20~25cm程である。10~20mm程の明黄色礫を多く含んでいる。

〔VII 層〕 10YR 4/3 にぶい黄褐色粘質シルト Dトレンチで確認されており、層厚は30cm程である。2~20mm程の明黄色礫を含んでいる。

〔VIII 層〕 10YR 3/3 暗褐色シルト Dトレンチで確認されており、層厚は30cm程である。10~50mm程の礫を含んでいる。

梨木畑貝塚に見られる扁平な礫からなる堆積層についての見解

観察された礫層は層厚2~90cmで、BトレンチからCトレンチの東部および西部に層厚を減じ、中央部付近で厚い堆積物である。これを構成する礫は扁平な円礫であり、礫の長軸径は1.5~10cm、中軸径は2~7cm、短軸径（すなわち厚さ）は0.4~1.5cmである。一部に長軸径が15cmを超える亜角礫をまれに含む。扁平な円礫は薄く剥がれやすい岩質のものを多く含む。堆積層は中礫サイズ以上の粒径の礫から構成され、砂やシルトサイズの粒子をほとんど含まない。連続する水平に近い層理が明確に認められるが、礫の長軸が層理に対して直立している礫も少なからず存在する。また、本層の下位および上位に堆積する土層は、粘土~シルト質の堆積物であり、中礫サイズ以上の礫で構成される本層は上位・下位の堆積物に対して特異な堆積物であるといえる。

層理に対して直立して堆積する礫の存在を除くと、自然界において同様な堆積物は、比較的規模が大きく勾配も大きな（4~7/1,000程度）、例えば扇状地を流下するような河川の河床ないし河原の堆積物として認められるほか、海浜において礫浜堆積として認められる場合がある。

梨木畑貝塚の調査地点は、南側に小規模な谷が切り込まれているものの、当該堆積物をもたらすような地形状態には無い。一方、礫層は層理が明瞭であり水平に近い点、シルト・粘土などの細粒堆積物が認められない点から、同層堆積の原因を南側に位置する谷からの土石流によるものと困難である。したがって、同層を構成する堆積物は谷に沿う流水や土石流による堆積物では無いと判断される。

また一方、調査区の海拔高度は最も低い地点でも0.7mを超える。また、本発掘調査において同層上下にある堆積層中から見出される遺物から、その堆積年代は縄文時代~古墳時代頃と特定されるが、少なくとも仙台湾において、過去数千年の間に海水準が1mを越えた証拠は得られておらず、また同層の分布は調査区外には連続しない極めて狭い範囲に限られることから、同層が砂礫から成る海浜地形としての「礫浜」を構成する堆積層と考えることにも無理がある。

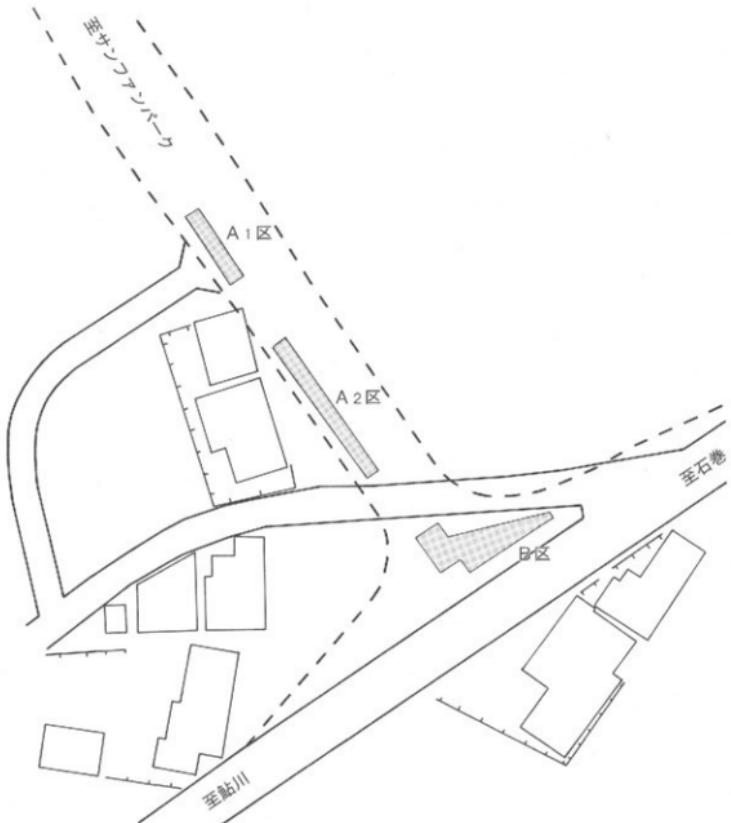
以上のことから、同層は自然の堆積層として捕らえることは、地形学のこれまでの知見において困難である。（東北大学理学部 松本秀明）

IV. 発見された遺構と遺物

サンファンパークアクセス道路関連調査地点

この調査地点のA区は、30cmから150cmで地山を検出しているが、堆積土に碎石等を多く含んでいることや調査地点の近くは採石場があったことから調査地点の近くまで山があったと考えられ、この地点には遺構・遺物などはなかったと考えられる。

また、B区では、約2m掘り下げたところで、黒色土を検出し、貝殻も微量ながら確認されたが、貝殻は細かく碎けたものであることから自然の貝と思われる。さらに約50cm程掘り下げたが、遺構・遺物は全く発見されなかった。



第3図 サンファンパークアクセス道路関連調査区

市道付設に伴う調査地点

A 区

調査対象区を幅5m、長さ25.5mにわたって地山までトレンチ掘削した。掘削部分の最も深い部分は約2m、浅い部分で約50cmである。

A区では、トレンチ中央から南側にかけてピットを確認しており、ピット内からは縄文土器が出土している。また、トレンチ北側で縄文時代晚期の土器が多く出土した。

B 区

調査対象区を幅5m、長さ15mにわたって地山までトレンチ掘削した。掘削部分の最も深い部分は約1m、浅い部分で約50cmである。

B区では、縄文時代前期及び晚期の土器と奈良・平安時代の土師器・須恵器などが出土している。また、調査区内で浅く不明瞭であるが落ち込みが確認されていることから、住居跡があった可能性が考えられる。しかし、調査地点は、もともと道路であり、搅乱されている部分が多く、住居跡等の全容は不明である。

県道石巻鮎川線道路改良に伴う調査地点

本調査では、A～Dの4つのトレンチを設定したが、Aトレンチからは遺構・遺物の検出はされなかつた。遺構・遺物が検出されたのは主にBトレンチとCトレンチからで、Bトレンチからは、奈良・平安時代の製塩遺構と製塩土器、土製支脚、土師器・須恵器等のほか、古墳時代の高杯、甌、壺、土鍤が検出された。また、古墳時代のものと思われる人骨が2体出土した。Cトレンチからは、奈良・平安時代の住居跡3軒と溝跡1条、焼土遺構などが確認された。また、B・Cトレンチでは、アサリ、ハマグリ、カキを中心とする貝層と骨角器が確認されているほか、縄文・弥生土器が出土している。

Bトレンチ

Bトレンチの東側では、土壤やピットを貝層下面の砂利面で確認され、鉄製の釣針や骨角器、製塩土器、土製支脚、土師器・須恵器等が出土している。また、西側でも貝層下面で製塩遺構と思われる焼土面と焼面下から灰層を確認し、それらの層から製塩土器や土製支脚などが出土している。さらに、下層から人骨2体が出土している。

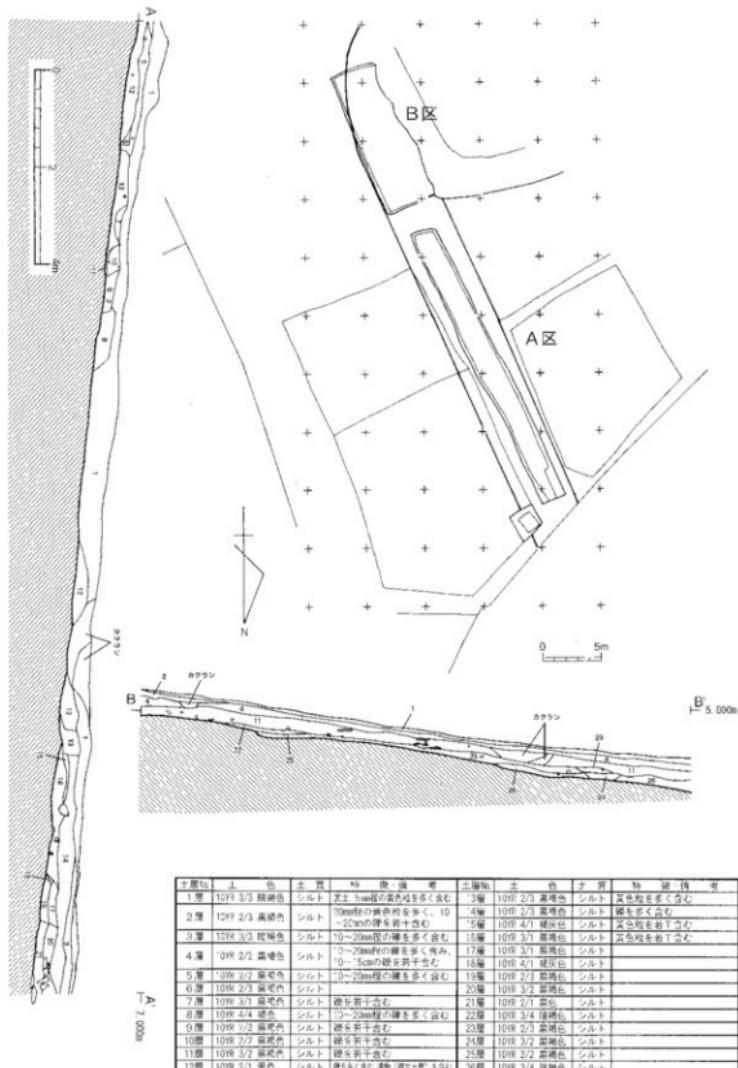
第1号製塩遺構

〔位置〕 Bトレンチ西側に位置している。

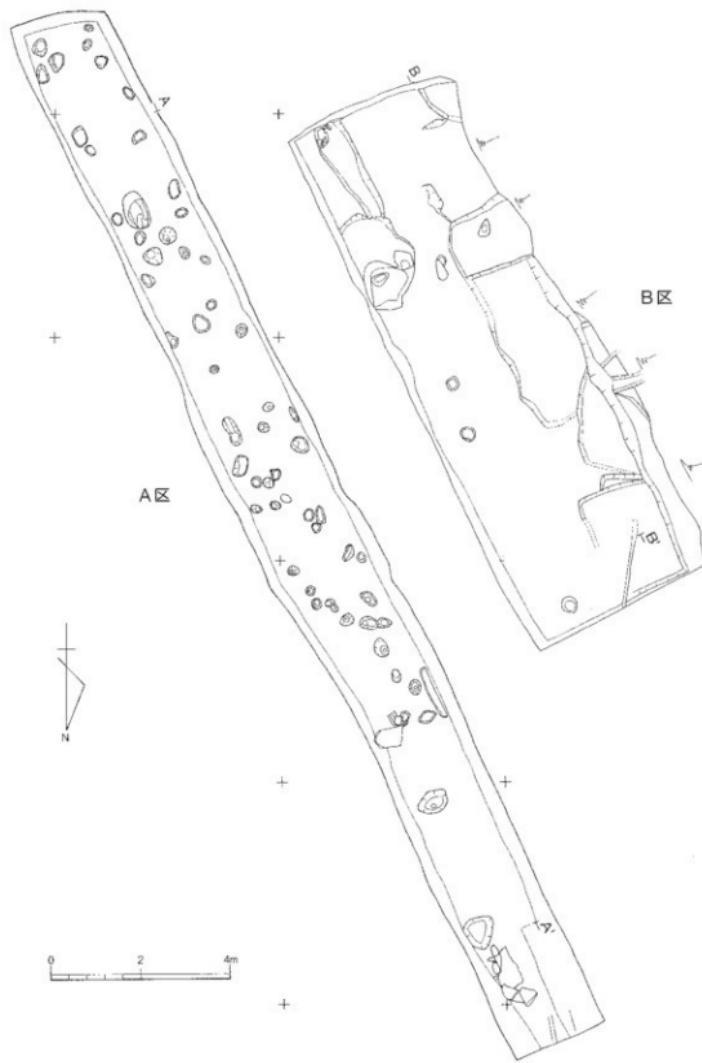
〔重複〕 北側で焼面（製塩遺構）と重複している。また、下層から人骨2体と土器集中地点（土壤か）が確認されている。

〔平面形・規模〕 平面形は東西に長い楕円形を呈しており、規模は東西約5.7m、南北約3.7mである。

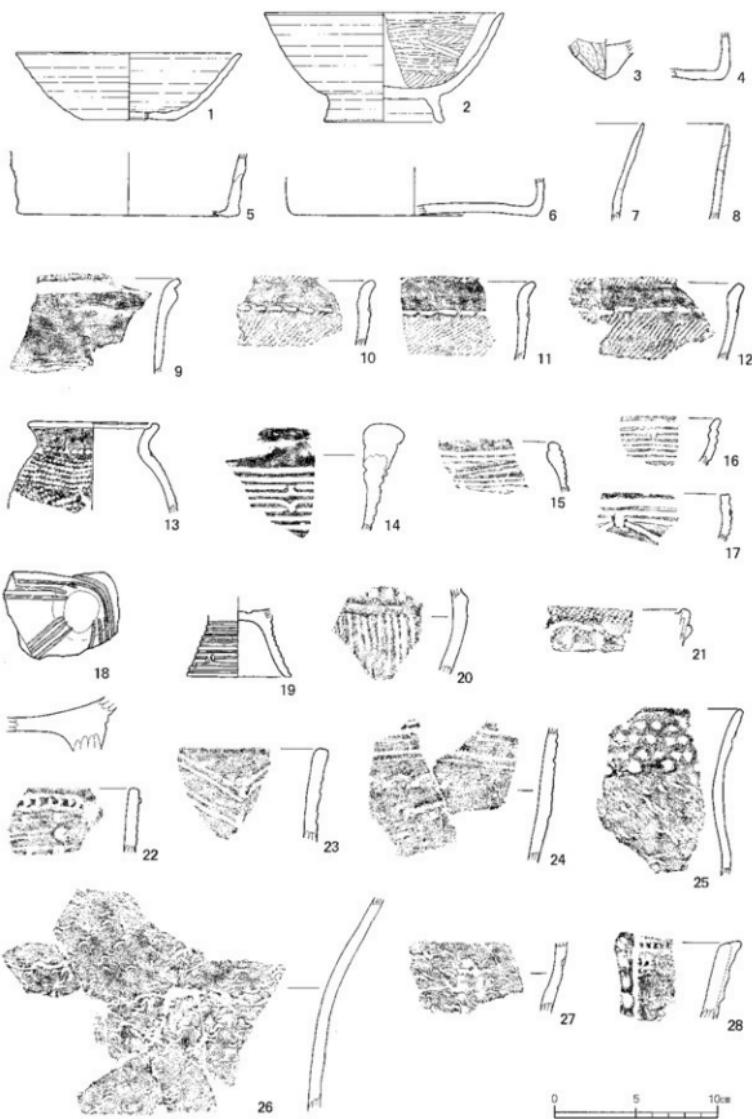
〔堆積土〕 遺構確認した際に、遺構内にハマグリを中心とする貝殻を多量に検出した。貝層の下は焼土、炭化物層、灰層が確認された。



第4図 市道付設に伴う調査区・土層断面図



第5図 市道付設に伴う調査地点 平面図



第6図 市道付設に伴う調査地点出土遺物

番号	種別	層位	基高[m]	柱径[m]	底径[m]	外 周 長 [m]	内 周 長 [m]	底 面 面 積 [m ²]	内 周 長 規 模		備考	付属品
									内 周 長	底面積		
1	洋瓦塗灰	層位	基高[m]	柱径[m]	底径[m]	外 周 長 [m]	内 周 長 [m]	底 面 面 積 [m ²]	クロロナデ	—	—	—
2	陶器裏塗灰	層位	基高[m]	柱径[m]	底径[m]	外 周 長 [m]	内 周 長 [m]	底 面 面 積 [m ²]	クロロナデ→ミガキ・萬色処理	—	—	—
3	陶器上器	層位	基高[m]	柱径[m]	底径[m]	外 周 長 [m]	内 周 長 [m]	底 面 面 積 [m ²]	クロロナデ	—	—	—
4	陶器上器	層位	基高[m]	柱径[m]	底径[m]	外 周 長 [m]	内 周 長 [m]	底 面 面 積 [m ²]	ハケメ	—	—	—
5	陶器上器	層位	基高[m]	柱径[m]	底径[m]	外 周 長 [m]	内 周 長 [m]	底 面 面 積 [m ²]	ハケメ	—	—	—
6	陶器上器	層位	基高[m]	柱径[m]	底径[m]	外 周 長 [m]	内 周 長 [m]	底 面 面 積 [m ²]	ハラナデ	—	—	—
7	陶器上器	層位	基高[m]	柱径[m]	底径[m]	外 周 長 [m]	内 周 長 [m]	底 面 面 積 [m ²]	ハラナデ	—	—	—
8	陶器上器	層位	基高[m]	柱径[m]	底径[m]	外 周 長 [m]	内 周 長 [m]	底 面 面 積 [m ²]	ハラナデ	—	—	—
9	学生土器	赤下圓式・横切丸式	—	—	—	—	6.1	19	縄文土器	大泊A'?	6-12	—
10	学生土器	赤下圓式・横切丸式	—	—	—	—	6-3	20	縄文土器	大泊1号坑	6-13	—
11	学生土器	赤下圓式・横切丸式	—	—	—	—	6-4	21	縄文土器	大泊A'赤 (山形六土壤附付)	6-14	—
12	学生土器	赤下圓式・横切丸式	—	—	—	—	6-2	22	縄文土器	大泊A'赤・横切丸付・斜削・井戸口・井戸口質 二つある斜削引き文	6-11	—
13	縄文土器	三十種連式?	—	—	—	—	6-7	23	縄文土器	大泊A'赤・横切丸井戸質文	6-15	—
14	縄文土器	大泊A'?	—	—	—	—	6-8	24	縄文土器	大泊A'赤?	井戸式鉢文(千菅)・ノープラ	—
15	縄文土器	大泊A'?	—	—	—	—	6-9	25	縄文土器	大泊A'赤式	6-16	—
16	縄文土器	大泊A'?	—	—	—	—	6-10	26	縄文土器	大泊2式	6-17	—
17	縄文土器	大泊A'?	—	—	—	—	6-10	27	縄文土器	大泊2式	6-18	—
18	縄文土器	—	—	—	—	—	6-6	28	縄文土器	大泊2式	基盤のS字状次第・斜削十頭 当2条・縦位ぬき延縫付付+斜削さき	6-19

市道付設に伴う調査地点出土遺物

〔出土遺物〕須恵器壺と内黒土師器壺、多量の製塙土器、土製支脚が出土した。

第1号土壤

〔位置〕Bトレンチ東側に位置している。

〔重複〕重複している遺構はない。

〔平面形・規模〕平面形は東西に長い椭円形を呈しており、規模は東西約1.4m、南北0.8mである。

〔堆積土〕焼土や炭化物を含んでいる。

〔出土遺物〕出土遺物のほとんどは須恵器、土師器の破片であり、出土量は少ない。

土器集中地点

〔位置〕Bトレンチ西側に位置している。

〔重複〕第1号製塙遺構の下層で検出している。

〔平面形・規模〕平面形は円形を呈しており、規模は径約2.3mほどである。

〔出土遺物〕土師器高杯、甕、壺、土錘（球形）などが出土している。

Cトレンチ

Cトレンチでは、西側で住居跡が3軒ほど確認し、東側ではピット群と繩文土器や赤生土器、統綱文土器を確認している。また、トレンチ中央部では溝跡を1条と焼土遺構を確認している。

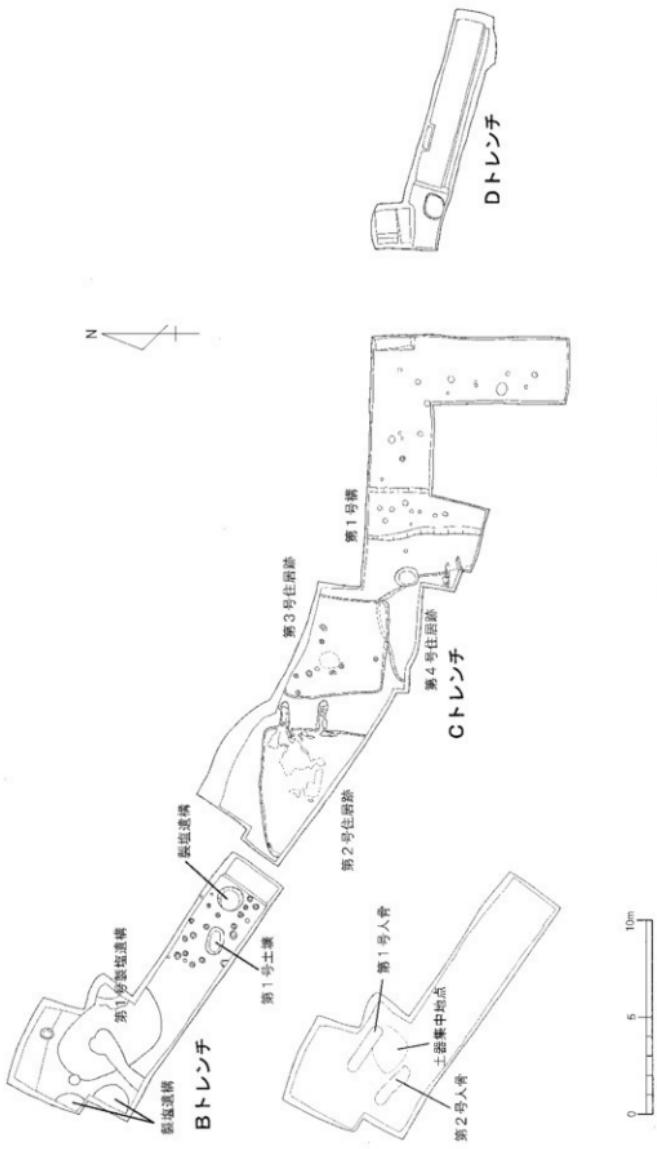
第2号堅穴住居跡

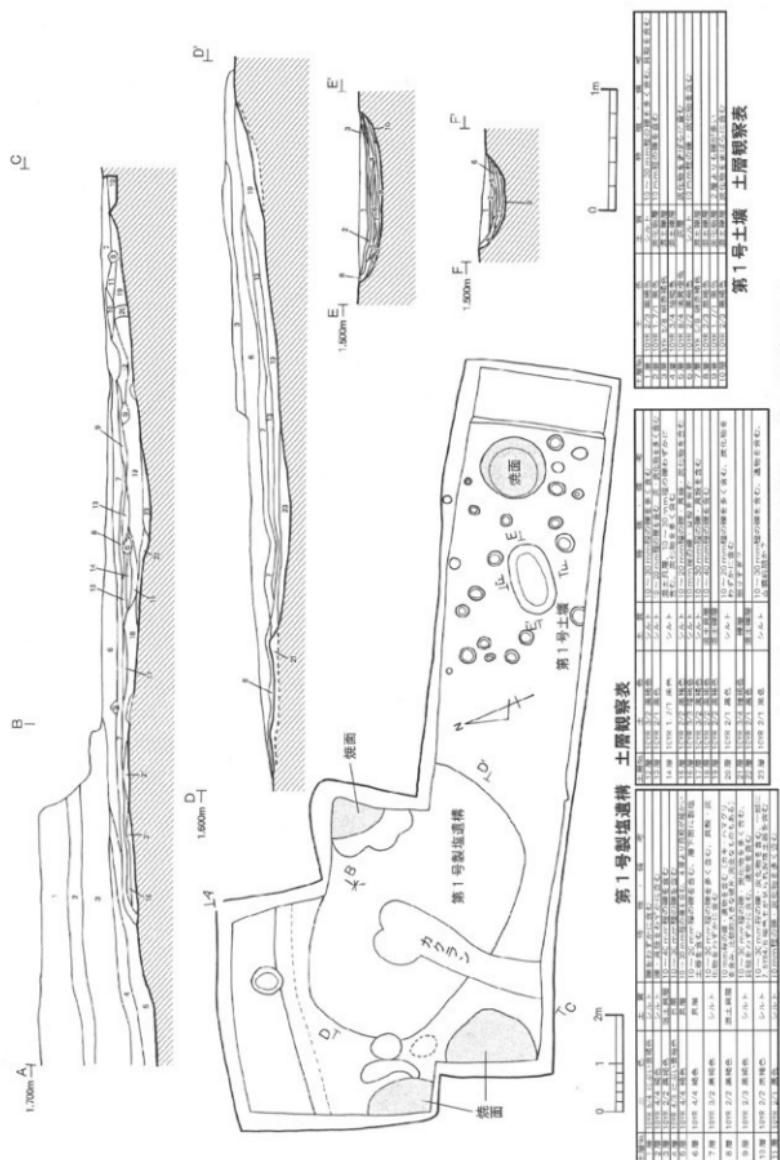
〔位置〕Cトレンチ西側に位置している。

〔重複〕確認されなかった。

〔平面形・規模〕東辺と北辺の二辺しか確認されていないが、隅丸方形を呈していると思われる。規

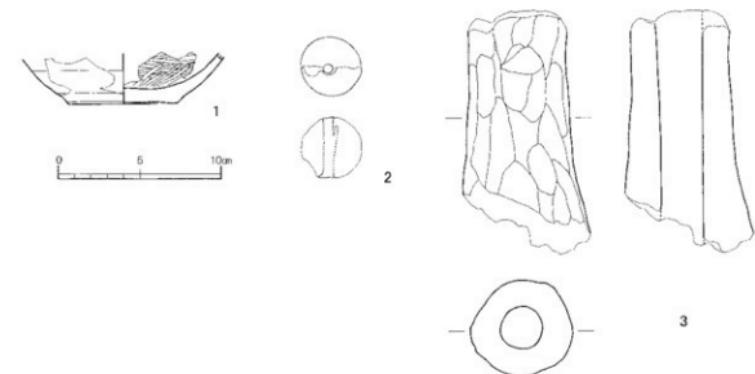
第7図 岐道石巻駄川線道路改良に伴う調査地点遺構配置図





第8図 日トレンチ南北断面及び第1号製壇遺構断面・第1号土壤断面図

第1号土壤 土層観察表



番号	砂利層	層位	堆高cm	口径cm	底径cm	外壁測定			内壁測定			備考	写真図版	
						厚さ	幅cm	高さ	厚さ	幅cm	高さ			
1 土質複合	—	—	(3.1)	—	(6.6)	1.0	1.0	0.6	0.6	1.0	0.6	—	—	
2 土質充実	—	—	(3.0)	(6.3)	(7.2)	1.0	2.0	—	3	土質	(3.0)	0.55	(2.7)	6-22

第9図 第1号製塙遺構出土遺物

模は、東西約6.7m×南北5.4m以上である。

〔堆積土〕 住居内の堆積土は自然堆積であり、5層からなる。堆積土層には10~15mm程の礫や貝殻を含んでいる。また、カマド内の堆積土は12層からなる。

〔壁・床面〕 砂利層を掘り込んでおり、床面には焼面と炭化物が見られる。壁は、東辺で26cm、北辺で18cm残存している。

〔カマド〕 新旧2つのカマドが確認された。南側のカマドは、カマドの袖がなく煙道のみが確認されしており、北側のカマドは、石を芯材にした袖部と煙道が確認されていることから、南側が古く、北側が新しいものと考えられる。

〔柱穴・ピット〕 床面でピットを確認しているが、住居跡に伴う柱穴かは不明である。

〔出土遺物〕 住居内からは、須恵器壺・高台付壺・甕、土師器壺・甕、土製支脚、製塙土器、骨角器、土錐(球形)、土鉢などが出土している。また、煙道の先端で土師器甕が出土している。

第3号堅穴住居跡

〔位置〕 Cトレンチ西側で第2号住居跡の東側に位置している。

〔重複〕 住居跡南辺で第4号住居跡と重複している。

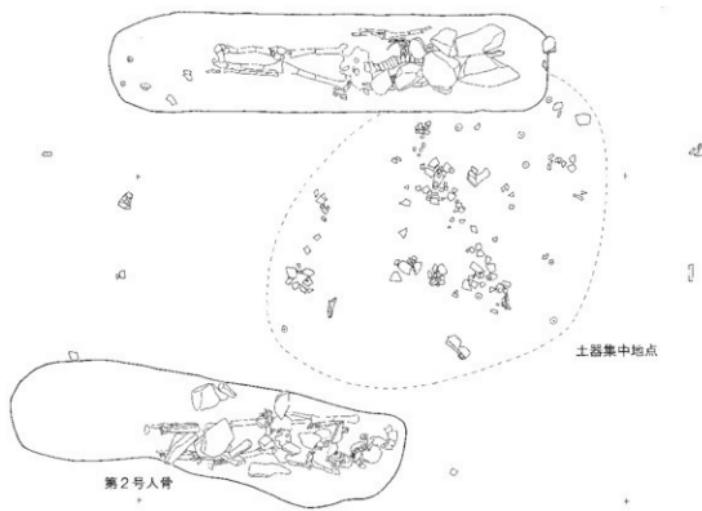
〔平面形・規模〕 住居跡の北辺を検出していないが、他の3辺から住居跡は隅丸方形を呈していると思われる。規模は、5.1m×5.1mである。

〔堆積土〕 堆積土は4層からなり、堆積土層には灰白色火山灰を含んでいる。

〔壁・床面〕 砂利層を掘り込んでおり、壁・床は砂利面である。壁面は約12cm残存している。

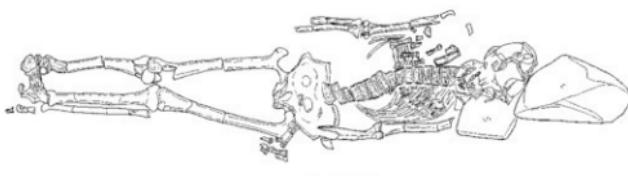
〔カマド〕 確認されなかった。

第1号人骨



Bトレンチ人骨出土状況及び土器集中地点

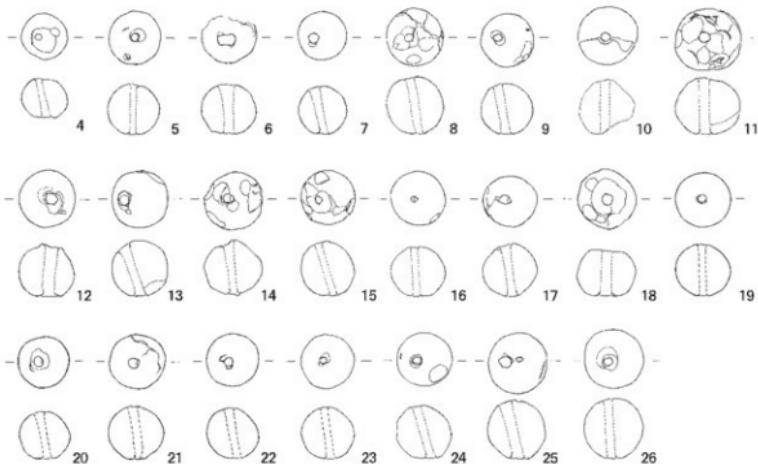
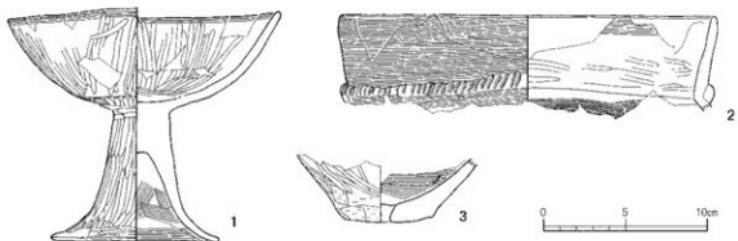
第1号人骨



第2号人骨

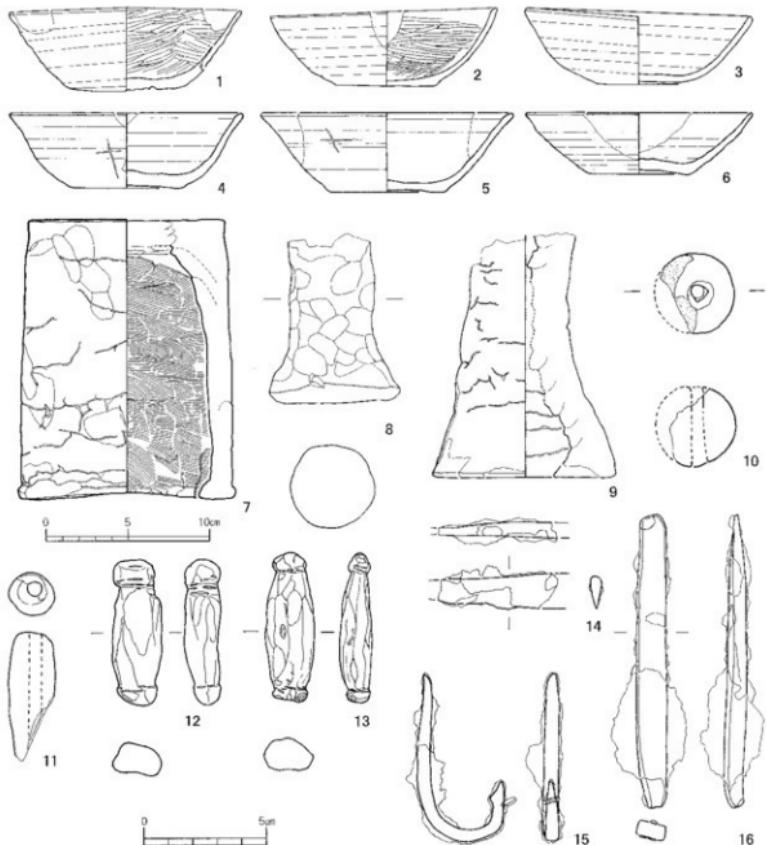


第10図 Bトレンチ人骨出土状況



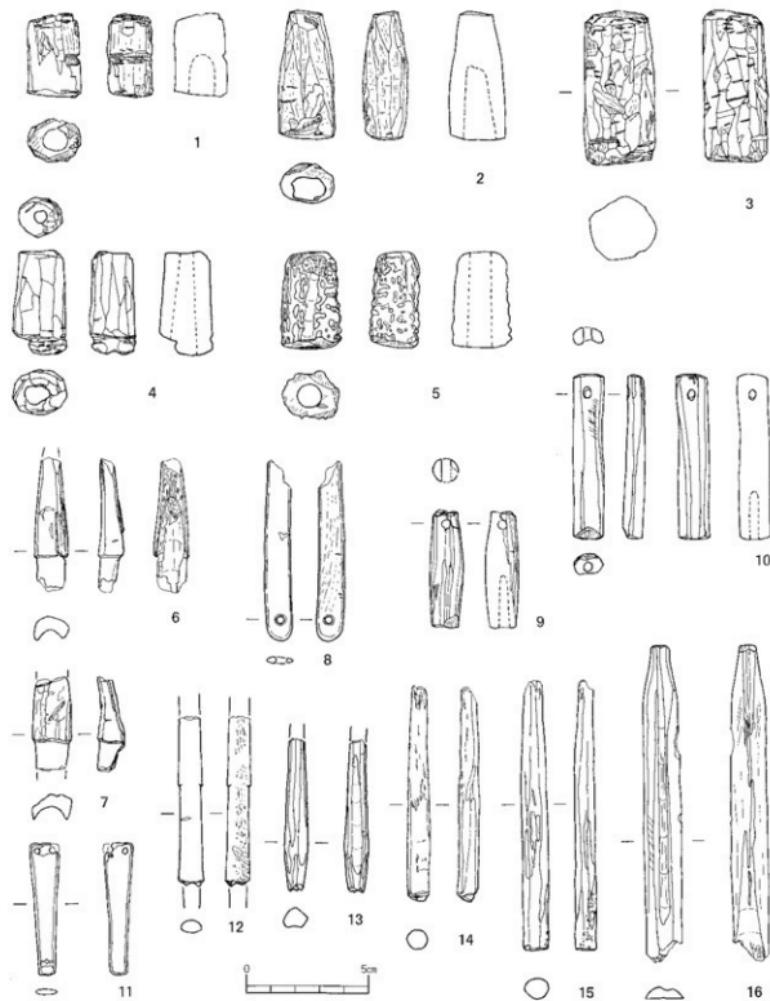
番号	種 別	層 位	目高cm	外径cm	内 径cm	外 围 厚 度		内 围 厚 度		個 数	写真番号
						左	右	左	右		
1	二筋陶高炉	地層	14.2	16.6	5.4	(口) ヨコナミガキ(外) 三ガキ (内) ミガキ		(上) ヨコナデミガキ(外) 三ガキ (内) ハコナミ ヨコナミ		6-23	
2	土器	層 位	古高cm	口徑cm	底径cm	外 围 厚 度	内 围 厚 度	式想	個 数	写真番号	
3	土器	底面	(14.2)	(22.8)	-	(口) ヨコナミ(外) ヨコナミ(内) ハコナミ	(口) ヨコナデミガキ(外) ハケム (内) ハコナミ	-	8-24		
4	土器	底面	14.2	-	5.4	(口) ヨコナミガキ		(上) ハコナミ	6-25		
5	土器	底面	14.2	-	5.4						
6	土器	底面	14.2	-	5.4						
7	土器	底面	14.2	-	5.4						
8	土器	底面	14.2	-	5.4						
9	土器	底面	14.2	-	5.4						
10	土器	底面	14.2	-	5.4						
11	土器	底面	14.2	-	5.4						
12	土器	底面	14.2	-	5.4						
13	土器	底面	14.2	-	5.4						
14	土器	底面	14.2	-	5.4						
15	土器	底面	14.2	-	5.4						
16	土器	底面	14.2	-	5.4						
17	土器	底面	14.2	-	5.4						
18	土器	底面	14.2	-	5.4						
19	土器	底面	14.2	-	5.4						
20	土器	底面	14.2	-	5.4						
21	土器	底面	14.2	-	5.4						
22	土器	底面	14.2	-	5.4						
23	土器	底面	14.2	-	5.4						
24	土器	底面	14.2	-	5.4						
25	土器	底面	14.2	-	5.4						
26	土器	底面	14.2	-	5.4						

第11図 Bトレニテ遺物集中地点出土遺物



番号	地名	種類	高さ cm	直径 cm	通量 cm	外観調査			内因調査			備考	学界団体
						花	葉	果	花	葉	果		
1	土居坪原	トウモロコシ	5.3	(34.4)	7.2	ロクロナデ	葉部細胞あり	—	ロクロナデミカガ	葉部無	—	—	7-1
2	十津川村	トウモロコシ	6.0	14.0	6.1	ロクロナデ	葉部細胞あり	—	ロクロナデミカガ	葉部無	—	—	7-2
3	須坂市	トウモロコシ	4.3	14.0	4.6	ロクロナデ	葉部細胞あり	—	ロクロナデミカガ	葉部無	—	—	7-3
4	白石町	トウモロコシ	6.6	(14.4)	7.0	ロクロナデ	葉部細胞あり	—	ロクロナデ	—	—	「十」疑問	—
5	久喜市	トウモロコシ	4.9	(5.6)	2.0	ロクロナデ	葉部細胞あり	—	ロクロナデ	—	—	「十」疑問	—
6	足利市	トウモロコシ	3.8	(14.0)	5.8	ロクロナデ	葉部細胞あり	—	ロクロナデ	—	—	—	—
番号	地名	種類	長さ cm	上端幅 cm	下端幅 cm	花	葉	果	花	葉	果	備考	学界団体
7	上毛支線	トウモロコシ	7.8	(12.0)	(18.4)	—	—	—	2	ロクロナデ	5.0	3.0	23.21
8	上毛支線	トウモロコシ	(6.5)	(5.0)	8.0	中実	—	—	3	ロクロナデ	6.2	2.0	18.26
9	上毛支線	トウモロコシ	(5.5)	(6.1)	11.6	—	—	—	14	ワタナベ	(4.9)	(5.0)	(0.05) (0.35)
10	篠之井	トウモロコシ	8.3	0.6	(25.34)	—	—	—	15	新幹野引	7.0	3.5	0.7 (14.67)
11	土居	トウモロコシ	2.0	0.6	(14.4*)	高さ5.3cm	—	—	16	鉢植え	2.1	1.2	0.7 (58.98)

第12図 Bトレーナー出土遺物 1



第13図 Bトレンチ出土遺物2

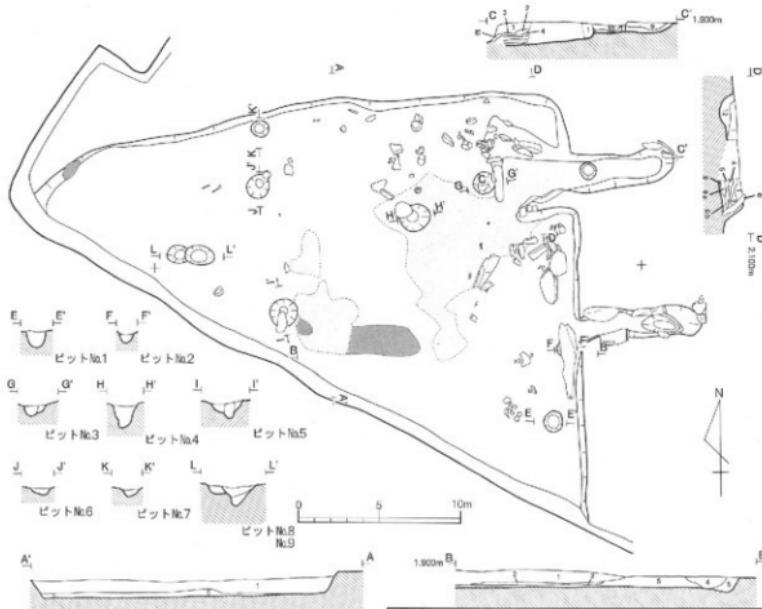
番号	種	通	高さ cm	幅 cm	厚さ cm	底径 cm	縦径 cm	横径 cm	横径/縦径	備考	参考文献
1	台内面		3.4	7.7	1.9	0.60	7-34				
2	舟形器		5.3	2.3	1.9	12.80	7-37				
3	舟形器		5.3	2.9	2.7	12.78	7-38				
4	舟内面		4.3	2.1	1.9	9.58	0.5-1.1cm	7-35			
5	舟形器		4.0	2.4	1.05	11.29	舟内 7.8cm 1.6cm	7-30			
6	残底盤		25.0	1.4	1.00	(3.50)					
7	残底盤		2.6	1.1	0.80	(2.82)					
8	舟形器		7.0	1.1	0.85	(2.71)	舟形?				
9	鉢形器		4.8	1.4	1.2	(4.34)					
10	鉢形器		5.2	1.3	0.9	7.39	中段外 20.3cm 年 G 4cm				
11	鉢形器		5.5	1.2	0.8	(7.60)	底径 25cm				
12	マヌ		(7.0)	1.7	0.75	(3.10)					
13	舟形器		(6.32)	1.0	0.8	(3.02)	舟内				
14	舟形器		(6.32)	0.9	0.9	(5.37)					
15	舟形器		(6.32)	0.9	0.9	(5.37)					
16	舟形器		(6.32)	1.0	0.8	(8.76)					



第14図 Bトレンチ出土遺物3

番号	種別	長さ cm	幅 cm	厚さ cm	重量 g	鉛筆	参考	考察記述					
1 台脚部 (5 個)	1.5	1.7	(8.28)	0.2	8-12	5	骨角部	9.9	9.1	2.6	81.31	直角	8-16
2 頸環貝 (14 個)	1.3	1.0	11.75	0.2	8-14	6	アラビコシ	17.4	19.2	2.2	72.23	直角	8-17
3 頸環貝 (12 個)	1.5	1.1	(13.57)	0.2	8-13	7	鶴角	17.6	2.8	2.6	79.35	直角	—
4 骨角部 (2 個)	2.7	2.3	2.1	28.07	直角	8-15							

B トレンチ出土遺物 3



土層	土色	土質	特徴	備考
1 層	19R 3/2 黒色	重土質	1-4cmの隙を多く含む	
2 層	19R 2/3 黒褐色	シルト	細粒砂、明かに褐色物が多く含む。鉛筆-長を含む	
3 層	19R 6/7 明褐色	シルト	1-2mmの細粒物、細砂物を含む。鉛筆-短を含む	
4 層	19R 3/2 黒褐色	シルト	1-2mmの細粒物、6-10mm程の消褪褐色砂を含む。鉛筆を含む	
5 層	19R 3/2 黑褐色	シルト	1-3mmの細粒物、5-10mm程の消褪褐色、明かに褐色物を含む。鉛筆を含む	

第2号住居跡 土層観察表

土層	土色	土質	特徴	備考
1 層	19R 3/2 黒褐色	シルト	1-1.5cm程の隙、鉛筆を含む	
2 層	19R 2/3 黑褐色	シルト	細粒砂、明かに褐色物が多く含む。鉛筆-長を含む	
3 層	19R 6/7 明褐色	シルト	1-2mmの細粒物、細砂物を含む。鉛筆を含む	
4 層	19R 3/2 黑褐色	シルト	1-2mmの細粒物、5-10mm程の消褪褐色砂を含む。鉛筆を含む	
5 層	19R 8/9 淡灰色	シルト	1-2mmの細粒物、鉛筆を含む	
6 層	19R 8/9 淡灰色	シルト	1-2mmの細粒物、鉛筆を含む	
7 層	19R 3/2 黑褐色	シルト	1-2mmの細粒物、鉛筆を含む	
8 層	19R 3/2 黑褐色	シルト	1-2mmの細粒物、鉛筆を含む	
9 層	19R 2/3 黑褐色	シルト	1-2mmの細粒物、鉛筆を含む	
10 層	19R 6/7 明褐色	シルト	1-2mmの細粒物、鉛筆を含む	
11 層	19R 3/2 黑褐色	シルト	1-2mmの細粒物、鉛筆を含む	
12 层	19R 2/3 黑褐色	シルト	1-2mmの細粒物、鉛筆を含む	

第2号住居跡カマド 土層観察表

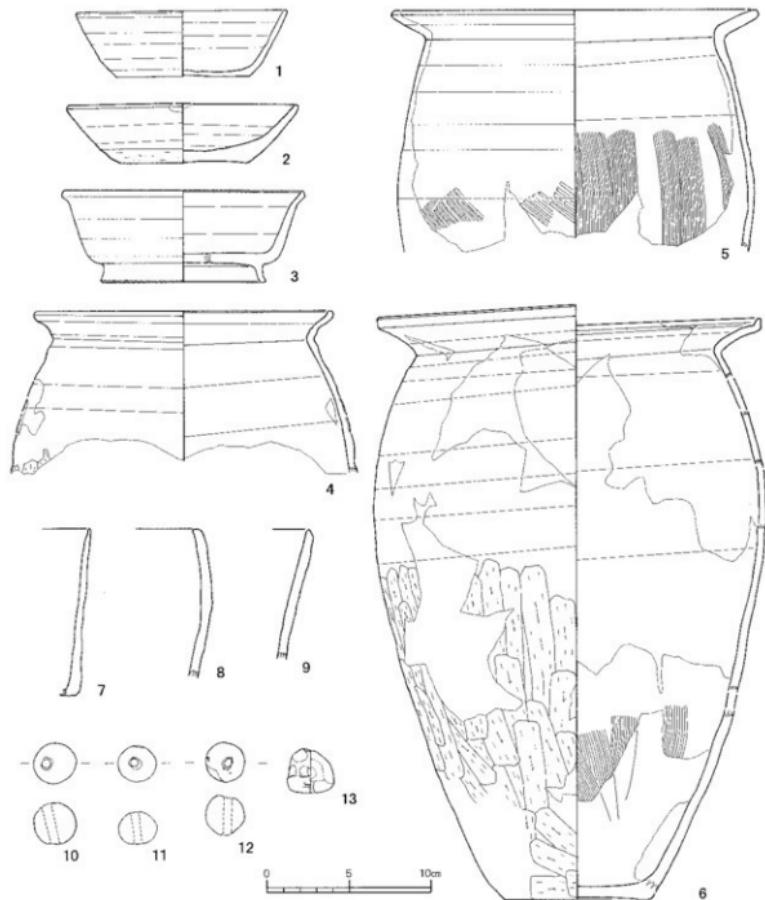
〔柱穴・ピット〕床面でピットを数箇所確認しているが、ピットは北西部に集中し、住居に伴うかは不明である。

〔出土遺物〕須恵器甕や土師器壺、高台付壺、土錐、土製支脚、骨角器などが出土している。

第4号堅穴住居跡

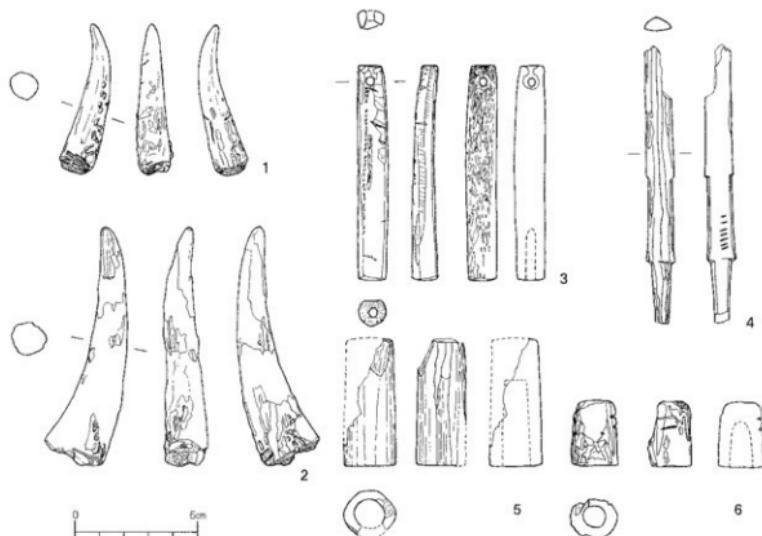
〔位置〕 C トレンチ西側で第3号住居跡の南側に位置している。

〔重複〕 第3号住居跡と重複している。



番号	種別	層位	器高 cm	口径 cm	底径 cm	外 田 領 聖		内 田 領 聖		備考	参考文献
						口徑	底径	内 田 領 聖	外 田 領 聖		
1	漆器残片		4.3	(3.0)	6.2	ロクロナデ・底部剥離ケズリ		ロクロナデ		9-1	
2	漆器残片		3.7	(14.3)	2.6	ロクロナデ・底部剥離ケズリ		ロクロナデ		9-1	
3	漆器残片	台付耳	5.7	(11.0)	(10.0)	ロクロナデ		ロクロナデ		9-3	
4	土師残片		(10.1)	(18.4)	—	古クロナデ		ロクロナデ		9-4	
5	土師残片		(14.9)	(22.6)	—	(C) 古クロナデ (底) ロクロナデ・ララキ		(D) ララキナデ (体) ロクロナデ・ハラナデ		9-5	
6	土師残片		37.0	23.5	8.0	(E) 古クロナデ (底) ロクロナデ・クズリ		(G) (H) ヒクロナデ (底) ヘラナデ		9-9	
7	陶器土器		10.2	—	—	ナガナシ		ナガナシ		9-6	
8	陶器土器		(9.7)	—	—	ミガキ		ミガキ		9-8	
9	陶器土器		(8.7)	—	—	ナガナシ		ナガナシ		9-7	
10	漆器	上縁	2.6	2.6	14.32	—	—	—	—	9-1	
11	漆器	上縁	2.3	0.5	9.82	—	—	—	—	9-1	
						厚さ	内高さ	外高さ	口径	備考	参考文献
						mm	mm	mm	mm		

第16図 第2号住居跡出土遺物



第17図 第2号住居跡出土骨角器

〔平面形・規模〕 住居跡の東辺と南辺を確認したがとともに調査区外に延びており、住居跡の全体は不明瞭である。東西は約4.4m以上、南北約4.8m以上で隅丸方形を呈していると思われる。

〔堆積土〕 堆積土は5層からなり、炭化物を含んでいる。

〔壁・床面〕 砂利層を掘り込んでおり、床は砂利面である。

〔カマド〕 住居東辺で直立している大型の礫が2個確認されており、カマドと思われる。

〔柱穴・ピット〕 確認されなかった。

〔出土遺物〕 鎏帶金具や土錐、骨角器、鈔文・弥生土器などが出土している。

焼土遺構

〔位置〕 Cトレンチ中央部の西よりで、住居跡の東側に位置している。

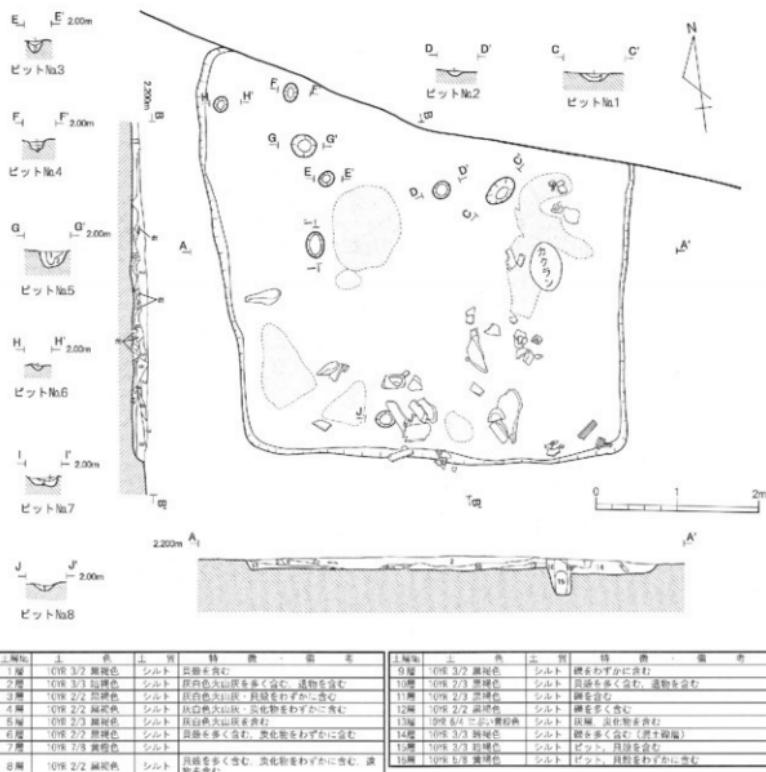
〔重複〕 重複は確認されなかった。

〔平面形・規模〕 南北約1.16m、東西約1.04mの隅丸方形を呈している。

〔堆積土〕 4層からなる。

〔出土遺物〕 土器片がわずかに出土しているのみである。

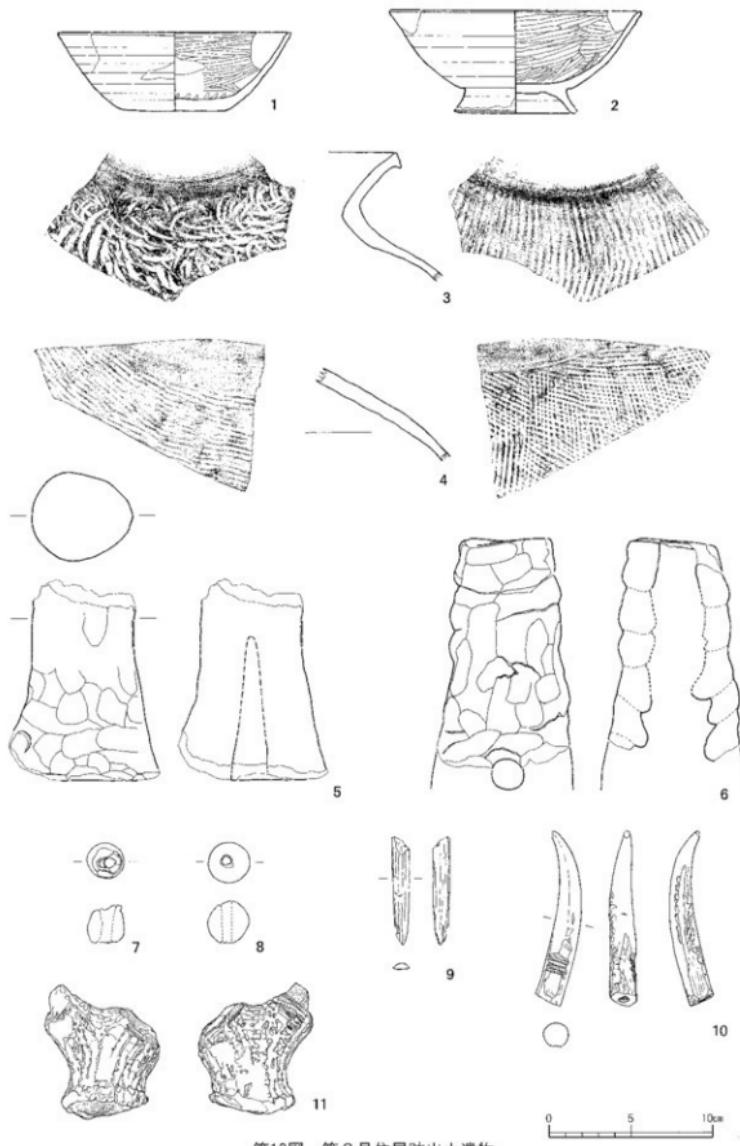
番号	種別	長さ cm	幅 cm	厚さ cm	重量 g	形状	参考	号	種別	長さ cm	幅 cm	厚さ cm	重量 g	形状	参考	号
1	骨角器	6.2	1.4	1.4	6.69	扁角	9-14	4	ヤス	(11.5)	1.2	0.5	(6.92)	9-17		
2	骨角器	9.8	2.7	1.8	20.23	扁角	9-15	5	骨角器	3.3	2.1	2.0	(2.5)	9-16		
3	武骨基部	8.9	1.7	1.1	9.61	骨角 基部 延3.4cm	9-16	6	骨角器	2.7	2.0	1.6	(8.68) (0.55cm)	骨角 基部 延3.4cm	9-19	



第18図 第3号住居跡 土層観察表

番号	柱	川	層位	高さ cm	口径 cm	底径 cm	底高 cm	内 容 詳 紹	内 容 詳 紹	備 考	写真番号
1	上	河	層位	1.9	(4.4)	5.8	ロクロナデ・葉状円角切刃	ロクロナデ・土ガキ・扇形丸刃	19-1		
番号	種別	川	層位	高さ cm	口径 cm	底径 cm	内 容 詳 紹	内 容 詳 紹	備 考	写真番号	
2	土	河	層位	9.4	(5.6)	7.6	ロクロナデ	(土) ロクロナデ+ミガキ・黑色色斑 (台) ロクロナデ	19-2		
番号	種別	川	層位	高さ cm	口径 cm	底径 cm	内 容 詳 紹	内 容 詳 紹	備 考	写真番号	
3	泥炭	河	層位	7.9	—	—	ロクロナデ・平行刃タキ	ロクロナデ・骨質文	19-3		
4	泥炭	河	層位	5.7	—	—	ロクロナデ・平行刃タキ	ロクロナデ・アフ貝取	—	—	
番号	種別	層位	高さ cm	上端径 cm	下端径 cm	底径 cm	内 容 詳 紹	内 容 詳 紹	備 考	写真番号	
5	土壤灰層	—	(0.4)	8.30	3.30	2.70	13-4	9 開闢溝 (5.6) 17.0 (15.5) (3.35)	13-8		
6	土壤灰層	—	(14.2)	7.1	(8.2)	中空直面 (1) 13-5	10 開闢溝 10.8 1.6 1.7 18.72 面角	13-9			
番号	種別	層位	外径 cm	内径 cm	重量 g	備 考	写真番号	内 容 詳 紹	備 考	写真番号	
7	土	土	—	2.3	0.65	11.30	13-6			—	
8	土	土	—	2.4	0.6	12.34	13-7			—	

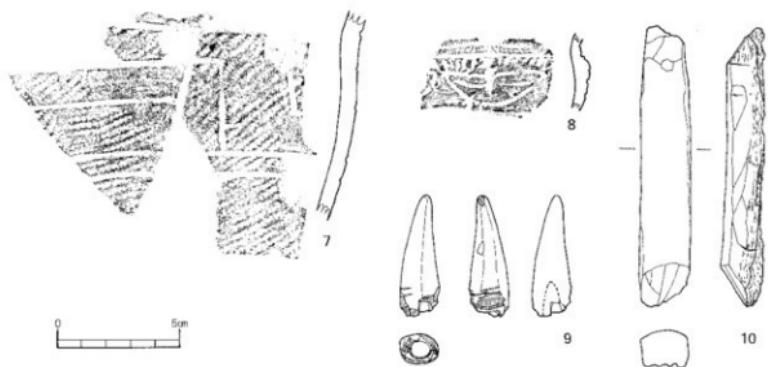
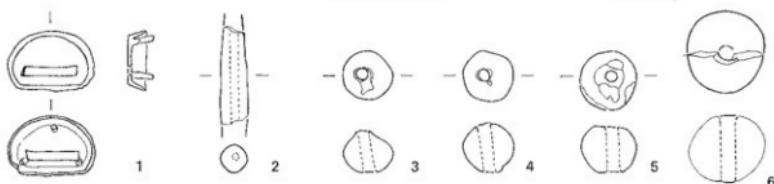
第3号住居跡出土遺物



第19図 第3号住居跡出土遺物

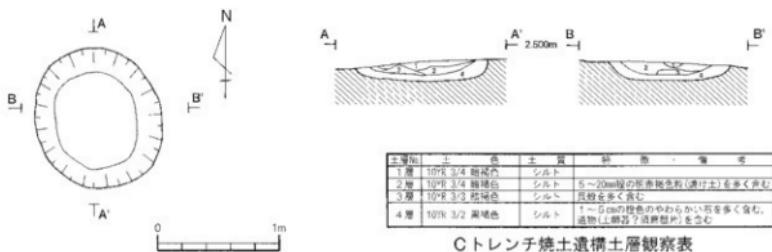


第4号住居跡



件名	種別	高さ cm	幅 cm	厚さ cm	重量 g	測定者	性質回数	件名	種別	高さ cm	幅 cm	厚さ cm	重量 g	測定者	性質回数	
1	陶器	2.5	3.6	1.1	(13.96)	丸沼	厚古	10-10	6	土罐	3.1	0.6	1(1.98)		10-15	
2	陶器	高さ cm	幅 cm	孔径 cm	重量 g	厚古	厚古回数		7	土罐	3.0	0.6	1(1.96)		10-15	
3	土器	2.0	0.5	0.3	(4.20)	厚古	厚古回数		8	土罐	3.0	0.6	1(1.96)		10-15	
4	土器	2.0	0.5	0.45	(4.45)	厚古	厚古回数		9	骨筒	5.0	1.6	1.3	5.54	厚古	10-18
5	土器	2.2	0.5	0.85	(10.4)	厚古	厚古回数		10	骨筒	11.6	2.0	1.7	23.06	厚古	10-19

第20図 第4号住居跡・出土遺物



第21図 C トレンチ焼土遺構

第1号溝跡

〔位置〕 C トレンチ中央部に位置している。

〔重複〕 重複は確認されなかった。

〔堆積土〕 1層からなり、貝殻片、土器片を含んでいる。

〔出土遺物〕 土師器壺、須恵器壺・甕、骨角器等が出土している。

D トレンチ

D トレンチは調査区の東端に位置しており、丘陵裾部にあたる。D トレンチでは、堆積土内から須恵器壺、土師器壺、土錐などが数点出土しているほかは、東端で南北に延びると思われる溝跡1条が確認されたのみである。

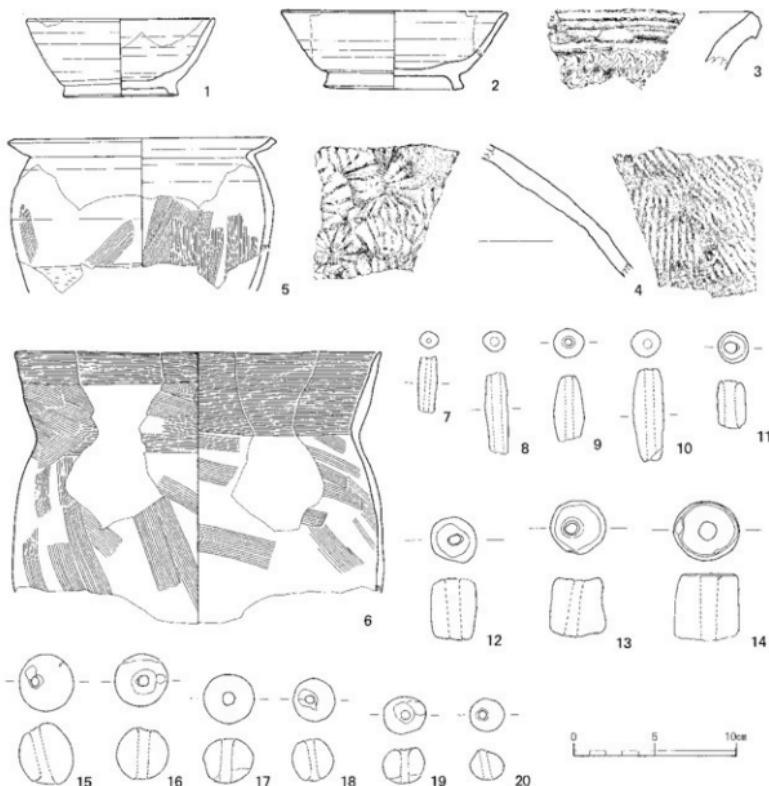
出土遺物について

出土遺物としては、住居跡や溝跡、製塩遺構などから土師器、須恵器や製塩土器、土製支脚、銅幣金具、骨角器など奈良・平安時代の遺物が出土している。また、B トレンチでは、製塩遺構の下層から人骨が2体とその周辺で、古墳時代前期の土師器壺、高杯、甕、土錐が出土しており、C トレンチの遺構外からは、縄文土器や弥生土器、続縄文土器などが出土している。

これらのほかに、貝層からマダイ、クロダイ、クジラなどの魚類や鹿、イノシシなどの獣類の骨、D トレンチの溝跡で確認されたトチの実などの自然遺物が出土している。

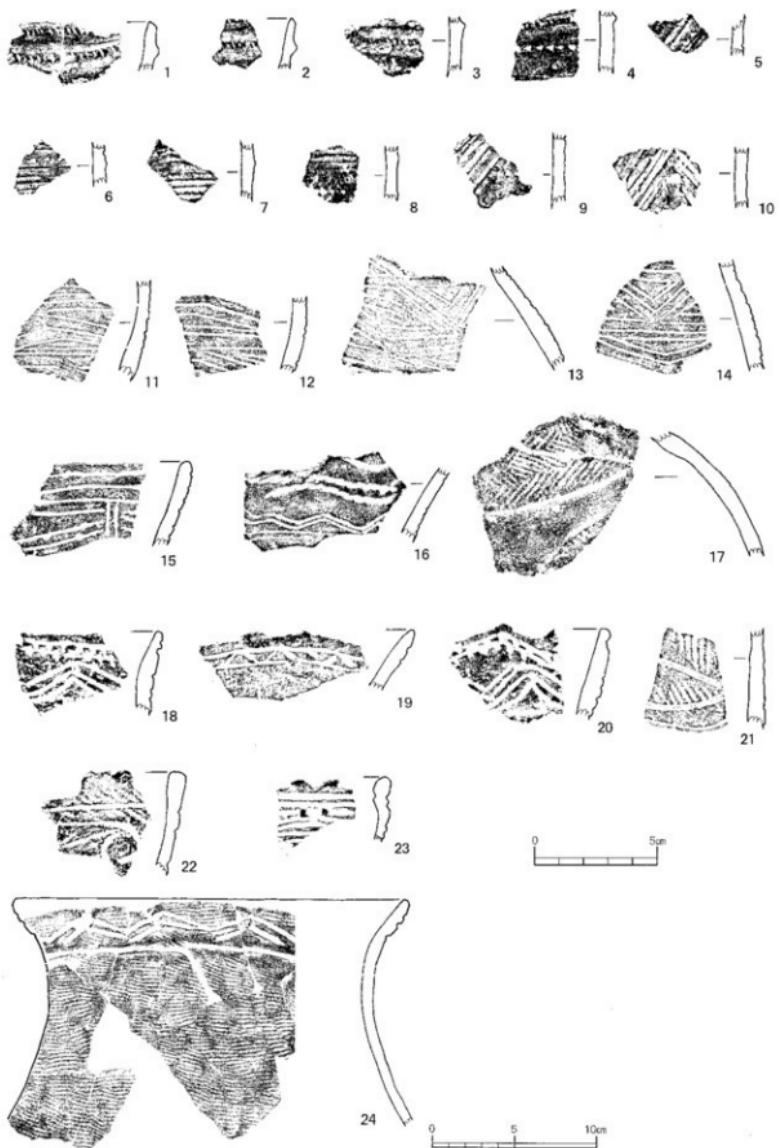
製塩土器は、ほとんどが破片であるが底径約15cm内外で器厚が3~5mm程の薄いものと10mm内外の厚手のものがあり、形態的にはともに底部からほぼ垂直に立ち上がるものと思われる。

土製支脚は、柱状で下部が膨らみ中実であるものや上部から下部に行くにしたがって径が大きくなる円柱状で中空のものがある。また、中空の土製支脚のなかには、円窓がつくものがある。

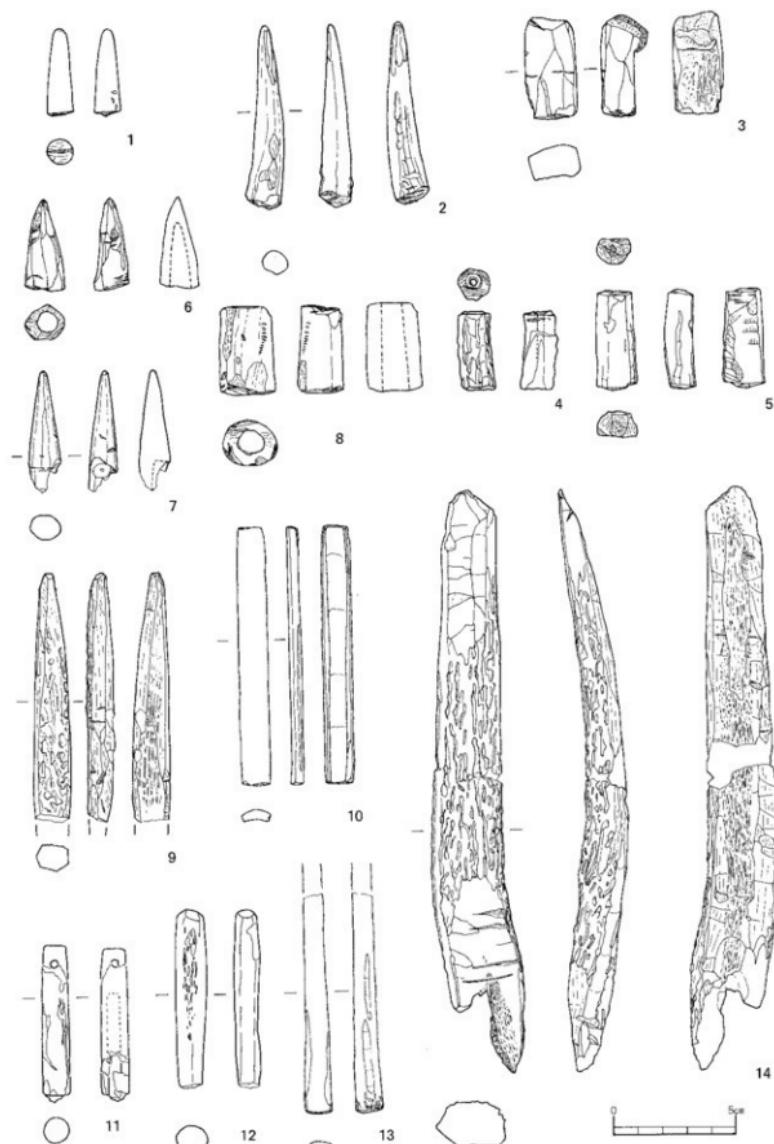


番号	形	寸	幅	高さ cm	口径 cm	底径 cm	出露厚 cm	外 壁 溝 突		内 壁 溝 突		名	写真版
								直	横	直	横		
1	直筒高身 平沿付			4.9	11.7	7.1		ロクロナデ		ロクロナデ			10-20
2	直筒高身 凸沿付			4.8	(14.0)	8.6		ロクロナデ		ロクロナデ			—
3	直筒高身 直沿付			(3.5)	—	—		ロクロナデ	底状凹槽	ロクロナデ	底状凹槽		10-21
4	直筒高身 直沿付			(3.5)	—	—		ロクロナデ	平行状突	ロクロナデ	平行状突		10-22
5	直筒高身 直沿付			(6.5)	(16.6)	—		(C) ロクロナデ	(B) ロクロナデ	(C) ロクロナデ	(B) ロクロナデ	ヘラナデ	10-24
6	直筒高身 直沿付			(7.0)	(27.6)	—		(D) ナデ-ヨコナデ	(体) ヘラナデ	(C) ヨコナデ	(体) ナデ		10-25
7	土瓶			(3.5)	1.2	0.3	(4.4)	15.	土瓶	3.5	0.6	41.54	11-9
8	土瓶			(5.1)	1.3	0.6	(6.7)	16.	土瓶	3.2	0.7	28.92	11-10
9	土瓶			(4.1)	1.9	0.4	(11.6)	17.	土瓶	3.2	0.7	(20.36)	11-11
10	土瓶			0.7	1.8	0.5	(15.6)	18.	土瓶	2.6	0.4	16.18	11-17
11	土瓶			2.8	1.1	0.5	(13.6)	19.	土瓶	2.6	0.5	(10.70)	11-13
12	土瓶			1.6	0.9	0.5	31.17	20.	土瓶	2.1	0.6	7.74	11-14
13	土瓶			3.7	0.4	0.6	8.47	21.	土瓶	2.1	0.6	7.74	11-14
14	土瓶			(4.1)	4.0	1.1	21.01	22.	土瓶	2.1	0.6	7.74	11-14

第222図 Cトレンチ出土遺物



第23図 C トレンチ出土遺物



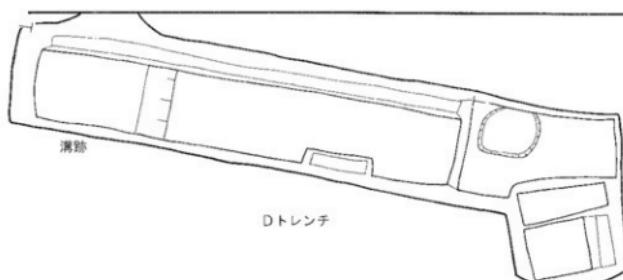
第24図 Cトレンチ出土遺物（骨角器）

番号	種類	備考	発見位置	番号	種類	備考	発見位置
1	鈎援文土器	後北C 2 - D	11-16	13	鈎生土器	円田式	17- 26
2	鈎援文土器	後北C 2 - D	11-17	14	鈎生土器	円田式	17-27
3	鈎援文土器	後北C 2 - D	11-15	15	鈎生土器	下下圓式	17-29
4	鈎援文土器	後北C 2 - D	11-18	16	鈎生土器	—	17- 31
5	鈎援文土器	後北C 2 - D	17-22	17	鈎生土器	—	—
6	鈎援文土器	後北C 2 - D	11-21	18	鈎生土器	天王山式	—
7	鈎援文土器	後北C 2 - D	11-26	19	鈎生土器	天王山式	11-30
8	鈎援文土器	後北C 2 - D	11-19	20	鈎生土器	天王山式	11-30
9	鈎援文土器	後北C 2 - D	1-24	21	鈎生土器	天王山式	11-32
10	鈎援文土器	後北C 2 - D	11-23	22	鈎文土器	—	—
11	鈎生土器	円田式	11-29	23	鈎文土器	—	11-34
12	鈎生土器	円田式	—	24	鈎生土器	—	11-35

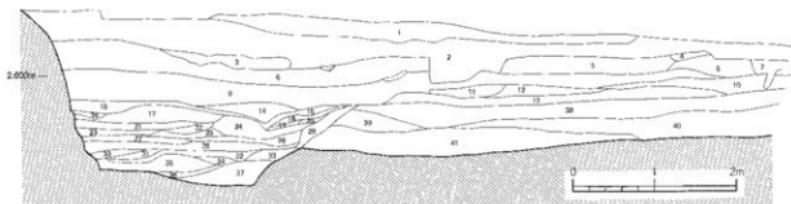
Cトレンチ出土遺物

番号	種類	大きさ cm	幅 cm	厚さ cm	重量 g	備考	発見位置
1	骨角器	3.6	1.1	1.1	3.17	鈎角	17-1
2	骨角器	2.5	1.4	1.4	7.58	鈎角	17-2
3	骨角器	4.2	2.1	2.0	13.41	鈎角	17-3
4	骨角器	5.3	1.5	1.3	(3.23)	鈎角 丟失	17-4
5	骨角器	4.7	1.6	1.1	6.75	鈎角	17-5
6	刺突器	3.8	1.6	1.45	3.84	鈎角 銛孔	12-6
7	骨角器	(5.0)	(3.2)	1.2	(4.01)	鈎角 2段 曲から直元	12-7
8	骨角器	3.6	2.2	1.9	10.41	鈎角 丸柱 1.0cm	12-8
9	鉄製骨刀?	(10.3)	1.6	1.2	(7.18)	鈎角	12-9
10	骨角器	10.7	1.2	0.5	6.76	—	12-10
11	釣針形剝離	(5.4)	1.1	1.1	(8.03)	釣針形存	12-12
12	骨角器	(7.4)	1.3	1.3	(8.14)	—	12-13
13	骨角器	(9.1)	1.1	0.4	3.51	—	12-14
14	鈎	(7.3)	2.6	1.45	(63.10)	鈎角	12-11

Cトレンチ出土骨角器



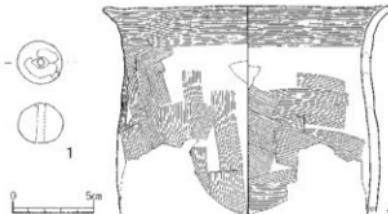
Dトレンチ



第25図 Dトレンチ溝跡断面図

土層番号	土 色	土 壤	特徴	備考
1層	10F 3/2 黄褐色	シルト	細胞状を含む 砂土	
2層	10F 3/4 黄褐色	シルト	2~5mmの根長毛、赤褐色の揮発性色	
3層	10F 4/3 に少し黄褐色	シルト	2~5mmの黄褐色の揮発性色を多く含む	
4層	10F 3/3 混合色	シルト	黒鉛(ラツリ)を多量に含む 黒土質層、炭化物を含む	
5層	10F 3/3 混合色	シルト	2~5mmの揮発性色を含む	
6層	10F 3/3 混合色	シルト	2~5mmの黒褐色を含む、炭化物を含む	
7層	10F 3/3 混合色	シルト	2~5mmの明黄色調を含む	
8層	10F 4/2 变質色	シルト	5~15mmの明黄色調を含む	
9層	10F 4/3 黄褐色	シルト	2~5mmの黄褐色を含む	
10層	10F 1/2 黄褐色	シルト	2~10mmの明黄色調、特に物をまぶらに含む	
11層	10F 4/2 变質色	シルト	2~10mmの明黄色調を多く含む、炭化物を含む	
12層	10F 1/2 に少し黄褐色	シルト	2~10mmの明黄色調をまばらに含む、炭化物を含む	
13層	10F 3/3 混合色	シルト	2~5mmの明黄色調を多量に含む、2~5mmの揮発性色を含む	
14層	10F 2/3 黄褐色	シルト	2~20mmの明黄色調を多量に含む、炭化物を含む	
15層	10F 2/2 黑褐色	シルト	2~10mmの明黄色調をまばらに含む、炭化物を含む	
16層	10F 3/2 黄褐色	粘質シルト	2~5mmの明黄色調をわずかに含む	
17層	10F 4/3 に少し黄褐色	シルト	2~10mmの揮発性色を含む	
18層	10F 3/4 黄褐色	シルト	2~5mmの揮発性色を多く含む	
19層	10F 4/4 黄褐色	粘質シルト	2~10mmの揮発性色を含む	
20層	10F 3/1 黄褐色	粘質シルト	2~10mmの揮発性色を含む	
21層	10F 4/4 黄褐色	粘質シルト	10~30mmの揮発性色を含む	
22層	10F 3/1 黄褐色	粘質シルト	2~10mmの揮発性色を含む	
23層	10F 4/2 变質色	粘質シルト	10~30mmの揮発性色を多く含む、炭化物をわずかに含む	
24層	10F 3/3 黄褐色	シルト	10~30mmの揮発性色を多く含む、炭化物をわずかに含む	
25層	10F 4/4 黄褐色	粘質シルト	2~10mmの揮発性色を多く含む	
26層	10F 3/2 黄褐色	シルト	2~10mmの揮発性色を多く含む	
27層	10W 5/2 に少し黄褐色	粘質シルト	2~10mmの揮発性色を含む	
28層	10W 4/3 黄褐色	粘質シルト	10~30mmの揮発性色を多く含む	
29層	10W 3/1 黄褐色	粘質シルト	2~10mmの揮発性色をまばらに含む、黄褐色を含む	
30層	10W 4/2 变質色	粘質シルト	2~10mmの揮発性色をまばらに含む、黄褐色を含む	
31層	10W 5/4 に少し黄褐色	粘質シルト	2~10mmの揮発性色を含む	
32層	10W 4/4 黄褐色	粘質シルト	2~10mmの揮発性色を含む	
33層	10W 4/1 黄褐色	粘質シルト	2~10mmの揮発性色を含む	
34層	10W 3/1 黄褐色	粘質シルト	2~10mmの揮発性色を多く含む	
35層	10W 5/4 に少し黄褐色	粘質シルト	2~10mmの揮発性色を含む	
36層	10W 4/4 黄褐色	粘質シルト	2~10mmの揮発性色を含む	
37層	10W 3/3 黄褐色	粘質シルト	2~10mmの揮発性色を含む	
38層	10W 4/3 黄褐色	粘質シルト	10~20mmの揮発性色を含む	
39層	10W 3/4 黄褐色	粘質シルト	15mmの揮発性色をまばらに含む	
40層	10W 4/3 上に少し黄褐色	粘質シルト	2~10mmの揮発性色を含む	
41層	10W 3/3 黄褐色	シルト	10~30mmの揮発性色を多く含む	

Dトレンチ溝跡土層観察表



地 号	埋 墓	層 位	外 径 cm	内 径 cm	高 度 cm	特 徹	その他の	備 考	写真回数
1	土 墓	2.5	0.45						12 15
2	洋 江	1.1	0.35	0.25	0.25	外 壁 坡 面	内 壁 坡 面	(C)ココア (E)ヘラバ・ナダ (D)ココア (E)ヘラバ	万葉図6 12-16

第26図 Dトレンチ出土遺物

V. Bトレンチ出土の人骨について

梨木畠貝塚からは、昭和51年の発掘調査の際に住宅地内の庭から頭部が北北東にあり、屈曲姿勢を呈していた9世紀頃の埋葬人骨が確認されている。

今回の発掘調査では、Bトレンチの製埴造構の下層から2体の伸展葬の人骨が確認された。人骨の周辺に古墳時代前期の土器などが検出されており、出土状況から人骨は古墳時代のものと考えられるが、時代を確認するために、地球科学研究所にC14年代測定を依頼した。また、人骨の取り上げや復元、性別等の分析を東北大學大学医学系研究科の百々辛雄教授に御協力をいただいた。

梨木畑貝塚出土人骨

百々幸雄・前田朋子・川久保善智・澤田純明・佐伯史子・遠藤 貢・堂地大輔

(東北大学医学部人体構造学分野)

平成14年、宮城県石巻市渡波字梨木畑所在の梨木畑貝塚より2体の人骨が発見された。2体とも仰臥伸展葬で、全身骨格が良好に保存される。両人骨とも頭位は東で、より北に位置する1号人骨は成人男性、南に位置する2号人骨は成人女性である。発掘調査の結果から、年代は古墳時代前期と考えられた。1号人骨、2号人骨の大腿骨骨幹部を試料として、地球科学研究所にC14年代測定を依頼したが、その結果1号人骨は 1720 ± 40 BP、2号人骨は 1850 ± 40 BPの未補正C14年代が得られた。考古学的に推定されていた年代より100年以上古い年代測定結果であるが、海洋リザーバー効果を考慮すれば、古墳時代という推定とそれほど大きく矛盾する結果ではないと考えられる。

以下に1号人骨、2号人骨について人類学的な概略を記載し、若干の考察を加えてみたい。

1号人骨

成人男性で、ほぼ全身骨格が保存される。藤井の式（藤井1960）を用いて大腿骨、脛骨の長さから推定される身長は、約162cm。

頭骨（写真図版1）

上顎骨の切歯槽部を除いてほぼ完全に復元される。上顎切歯は右の側切歯、または左の中切歯に欠損があるが、ここでは右の側切歯の欠損と仮定して復元を行った（写真図版2のc）。この欠損は先天的なものか、発掘作業中に失われたものは明らかでない。歯の咬耗は軽度で、プローカの1度ないし2度である。頭骨の主縫合では、矢状縫合の外板の瘻着がかなり進んでいる。歯の咬耗の所見と合わせて判断すると、この人骨の年齢は壮年期後半から熟年期前半（30～50歳）と考えて大過ないであろう。

頭骨の主要計測値は表1に、非計測的形態小変異の出現状態は表2に示した。頭骨の観察的所見では、顎面が面長で、眼窩も高く、鼻骨は狭長で、現代的な印象が強い。縄文人やアイヌを想わせる特徴はまったくと言ってよいほど認められない。

表1. 1号および2号人骨頭蓋の計測値及び示数（mm）

Martin's No.	計測項目	1号人骨	2号人骨
【頭蓋】			
1	頭蓋最大長	186	178
5	頭蓋底長	107	100
8	頭蓋蓋最大幅	137	139
8/1	頭蓋長幅示数	73.7	78.1
9	最小前頭幅	91	96
9/3	横前頭蓋示数	66.4	69.1
17	バジオングレグマ高	135	130
17/1	頭蓋長高示数	72.6	73.0
17/8	頭蓋幅高示数	98.5	93.5
【顎面頭蓋】			
40	顎長	-	-
45	頸骨弓幅	138	(129)
48	上顎高(gv)	(77)	(69)
48/45	コルマン上顎示数	(56.8)	(53.5)
51	頸底高	42	(42)
52	頸底高	37	34
52/51	頸底示数	88.1	(81.0)
54	鼻幅	-	(23)
55	鼻高	-	50
54/55	鼻示数	-	(46.0)
【顎面平頂骨】			
	前頭骨弦長	99.5	(94.8)
	前頭骨座縫長	17.7	(16.2)
	前頭骨平頂示数	17.5	(17.1)
	鼻骨弦長	6.8	8.9
	鼻骨座縫長	2.5	3.0
	鼻骨平頂示数	36.3	33.3
	頬上顎骨弦長	107.7	-
	頬上顎骨座縫長	-	-
	頬上顎骨平頂示数	-	-
【下顎骨】			
65	下顎頭幅	124	(117)
66	下顎角幅	103	(90)
68	下顎長	72	(75)
69	オトガイ高	-	-
69(3)	下顎体厚	14	11
70	下顎枝高	67	(58)
71	下顎枝幅	33	31
71/70	下顎枝示数	49.3	(53.4)
79	下顎枝角	137	136

歯

歯冠計測値は表3に示した。

上顎および下顎左第3大臼歯が欠損するが、第2大臼歯遠心面に隣接面咬耗が認められることから判断して、先天的に未萌出であつた可能性がある。上顎切歯には明らかなシャベル状形質が認められる。上顎左第1小白歯は矮小歯である(写真図版2のc)。カリエスは軽度なものが下顎左第2大臼歯と右第3大臼歯に認められる。

体幹骨

頸椎は7個がすべて保存される。胸椎は椎弓を中心に11個が、腰椎も椎弓を中心に5個が同定される。仙骨は第1仙椎の破片が残るのみ。これらの椎骨の椎間関節に骨棘や多孔性といった加齢的な変化は認められない。第11胸椎と第12胸椎は椎体、椎弓とともに癒合するが(写真図版2のd, e)、これが圧迫骨折のような外傷性の変化であるのか、化膿性脊椎炎のような病変に基づく変化であるのかは、現段階では明らかにし得ない。肋骨はすべて断片的に保存される。

四肢骨(写真図版2のa, b)

主要計測値は表4に示した。

上肢帯では、鎖骨と肩甲骨が部分的に残存する。左肩甲骨の腋窩線には明瞭な背側溝が認められる。肩甲骨の関節窩に加齢性変化は認められない。

上腕骨は、左右とも骨頭を欠くが、それ以外はほぼ完全である。左に滑車上孔が存在していたようである。関節面に加齢的变化は認められない。橈骨は、右は骨体上半部、左は遠位三分の二が保存される。尺骨は左右とも遠位端を欠くのみで、比較的良好に保存される。右の滑車関節面は横走する骨堤により二分される傾向にある。

手骨は、右は手根骨3点、中手骨3点、指骨8点が、左は手根骨4点、中手骨4点、指骨6点が同定

表2. 1号および2号人骨頭蓋の非計測的形態小変異

	1号人骨		2号人骨	
	R	L	R	L
1. 前頭縫合	(-)	(-)	(-)	(-)
2. 眼窓上神経溝	(-)	(-)	(-)	(-)
3. 瞳窓上孔	(-)	(+)	(-)	(-)
4. ランダ小骨	(-)	(-)	(-)	(-)
5. 横突縫合痕跡	(+)	(-)	(-)	(-)
6. アステリオン骨	(+)	(-)	(-)	(/)
7. 後頭乳突縫合骨	(+)	(+)	(土)	(+)
8. 頸動脈骨	(+)	(+)	(/)	(+)
9. 頸動脈窓	(/)	(/)	(+)	(/)
10. 肋骨結節	(-)	(-)	(-)	(-)
11. 強筋突起	(/)	(/)	(-)	(-)
12. 舌下神経管二分	(+)	(-)	(+)	(-)
13. フラユケ孔	(-)	(-)	(-)	(-)
14. 頚上乳頭成不全	(-)	(-)	(/)	(-)
15. グラサリウス孔	(/)	(/)	(土)	(+)
16. 脊神孔	(/)	(/)	(/)	(/)
17. 内耳口蓋管	(/)	(/)	(/)	(/)
18. 横突縫合痕跡	(-)	(+)	(/)	(/)
19. 頸動脈孔二分	(/)	(/)	(-)	(/)
20. 失状洞溝左折	(-)	(-)	(+)	(-)
21. 強筋突起突起骨槽	(/)	(/)	(/)	(/)
22. 無舌骨筋神経済骨標	(-)	(-)	(-)	(-)

+ : 有 土 : 痛向 - : 無 / : 欠損または不明

表3. 1号および2号人骨の歯冠計測値(mm)

【上顎】	1号人骨				2号人骨			
	近遠心径		唇・頬舌径		近遠心径		唇・頬舌径	
	右	左	右	左	右	左	右	左
I1	9.46	9.05	8.09	8.10	8.66	8.51	7.67	7.83
I2	-	8.52	-	7.79	6.52	-	5.69	-
C	8.40	8.44	9.00	9.54	8.05	7.76	8.62	8.75
P1	7.21	-	9.74	-	7.34	7.41	9.13	9.18
P2	7.30	7.30	9.86	9.94	6.98	7.05	8.77	8.92
M1	10.73	10.80	11.87	11.97	10.81	10.40	11.79	12.12
M2	10.35	10.53	12.15	12.45	10.91	10.94	11.96	13.14
M3	9.56	-	12.05	-	-	-	-	-
【下顎】								
I1	5.63	6.03	6.51	6.57	5.26	5.32	5.86	6.43
I2	6.70	6.79	6.80	7.09	-	5.83	-	6.54
C	7.49	7.52	8.21	8.42	6.97	6.97	7.89	7.81
P1	7.07	7.50	8.28	8.21	7.28	7.26	7.79	7.97
P2	7.11	7.44	8.58	8.60	6.97	7.26	8.19	8.14
M1	11.91	12.03	11.64	11.05	11.24	11.24	11.12	10.96
M2	11.49	12.01	11.10	11.12	11.18	11.90	10.87	11.03
M3	10.95	-	10.48	-	-	-	-	-

される。

寛骨は左右とも、大坐骨切痕と寛骨臼を含む破片が残存する。大坐骨切痕の形態は明らかに男性型。大腿骨は、左右とも骨頭と遠位端の一部を欠損する以外はほぼ完全。粗線は比較的強く発達し、骨体の柱状性もかなり顕著に認められる。関節面に加齢的变化はない。脛骨は、右は遠位端を欠くが、左はほぼ全長にわたって保存される。骨体中央部に扁平性は認められない。脛骨大腿骨示数は78.5で、繩文人平均83.3、アイヌ平均82.8 (Yamaguchi 1989)より明らかに小さく、和人的である。腓骨は近位骨端を欠く以外は良好に保存される。左右とも外側面に軽度の陥凹を見る。足根骨は、左踵骨、左立方骨、右舟状骨以外はすべて断片的。その他足骨では、右中足骨1点と指骨1点が同定される。

2号人骨

成人女性で、ほぼ全身の骨が残存する。藤井の式 (藤井 1960) を用いて右尺骨最大長から推定される身長は、約149cmである。

頭骨 (写真図版3)

頭蓋冠に部分的欠損があるが、ほぼ完全に復元される。歯の咬耗は僅かで、平均してプローラーの1段階段階にある。頭骨の3主縫合も癒合の傾向はほとんど見られないようである。これらの所見から判断すると、この人骨の年齢は壮年程度（20歳～40歳）と考えて差し支えないと思われる。

頭骨の主要計測値は表1に、非計測的形態小変異の出現状態は表2に示した。顔面は1号人骨ほどには面長ではなく、眼窓の高さも中等。鼻骨は女性としては相当に幅広く、水平面での湾曲もかなり強い。これらの点は一見アイヌの特徴を想わせるが、眼窓縁が丸みを帯び、眉間より眉弓が発達する点や強い歯槽性の突顎の存在は、どちらかと言えば和人的である。

歯

歯冠計測値は表3に示した。

右の下顎側切歯が失われる以外は、歯は上顎、下顎とも切歯から第2大臼歯までが保存される。第2大臼歯の遠心面に隣接面咬耗がみられないので、上顎、下顎とも第3大臼歯は未萌出であった可能性が高い。カリエスはいずれの歯にも観察されない。上顎側切歯には明らかなシャベル形態が認

表4. 1号および2号人骨四肢骨の計測値と示数(mm)

Martin's No.計測項目	1号人骨		2号人骨	
	右	左	右	左
【頭骨】				
4 中央垂直径	(11)	-	-	(8)
5 中央矢状径	(13)	-	-	(12)
4/5 中央断面示数	(84.6)	-	-	(66.7)
5 中央周	(38)	-	-	(35)
【上顎骨】				
5 中央最大径	(23)	(23)	(22)	(23)
6 中央最小径	(18)	(18)	(17)	(17)
6/5 中央断面示数	(78.3)	(78.3)	(77.3)	(73.9)
7 背体遮小周	62	65	60	60
【蝶骨】				
3 背体遮小周	-	45	40	40
4 背体横径	-	17	17	15
5 背体矢状径	-	12	10	11
5/4 背体断面示数	-	70.6	58.8	73.3
【尺骨】				
1 最大長	-	-	229	-
3 背体最小周	-	40	34	34
11 骨体矢状径	13	14	11	11
12 骨体横径	18	16	16	15
11/12 骨体断面示数	72.2	87.5	68.8	73.3
11' 骨体矢状径	13	14	11	11
12' 骨体横径	18	16	16	16
11/12' 骨体断面示数	72.2	87.5	68.8	68.8
【胫骨】				
1 最大長	-	446	-	-
5 背体中央矢状径	29	29	26	26
7 背体中央横径	26	27	25	25
6/7 中央断面示数	111.5	107.4	104.0	104.0
8 背体中央周	88	89	80	79
9' 背体上最大径	33	33	31	31
10' 背体上最小径	25	25	25	24
10'/9' 背体断面示数	75.8	75.8	80.6	77.4
【距骨】				
1 全長	-	343	-	-
1a 最大長	-	350	-	-
3 中央最大矢状径	(29)	29	-	-
9 中央横径	(22)	22	-	-
9/8 中央断面示数	(75.9)	75.9	-	-
10 背体中央周	(80)	80	-	-
10b 背体最小周	73	72	-	-
10b/1 厚原示数	-	21.0	-	-
【腓骨】				
2 中央最大径	(18)	(17)	-	-
3 中央最小径	(10)	(10)	-	-
3/2 中央断面示数	(55.6)	(58.8)	-	-
4 中央周	(47)	(45)	-	-
4a 最小周	36	36	-	-

められる。左上顎の側切歯は矮小歯である（写真図版4のc）。

体幹骨

頸椎は環椎、軸椎のほか4点が保存される。椎弓を中心に胸椎が6ないし7点、腰椎が4ないし5点同定される。仙骨は第1および第2仙椎と左の耳状面を含む破片が残存する。椎間関節に骨棘や多孔性といった加齢的変化はほとんど認められない。肋骨は左の第1肋骨が良好な状態で保存される以外はすべて断片的。

四肢骨（写真図版4のa, b）

主要計測値は表4に示す。

左鎖骨は内側端を欠く以外、全長にわたって良好に保存される。右の鎖骨は見あたらない。肩甲骨は左の外側半部の保存が良好である。腋窩縁には痕跡的な背側溝を認める。関節窓に加齢的な変化はない。

上腕骨は左右とも骨頭を除いてほぼ完全に保存される。骨体中央部は比較的扁平。関節面に加齢的变化はみられない。橈骨は、右は全長にわたって保存されるが、茎状突起を欠く。左は両骨端を欠損する。尺骨は、右は完全、左は遠位端を欠く。滑車関節面は横走する骨堤により上下に二分する傾向を示す。手骨は、右は手根骨4点、中手骨4点、指骨9点が、左は手根骨1点、中手骨4点、指骨4点が同定される。

寛骨は左右とも大坐骨切痕と寛骨臼を中心とした部分が比較的良好に保存される。大坐骨切痕の形態はどちらかと言えば女性的で、左右とも浅い前耳状面溝が形成される。

大腿骨は左右とも遠位端を欠くが、骨体はかなり良好に保存される。粗線の発達は強くなく、骨体中央部の柱状性も程度。脛骨は、右は断片的。左は骨体中央部を含む長さ約25cmの破片が残存する。中央部に扁平性はみられない。腓骨は左が長さ20cmにわたって保存される。外側面に凹溝の形成はない。足骨は見あたらない。

考察

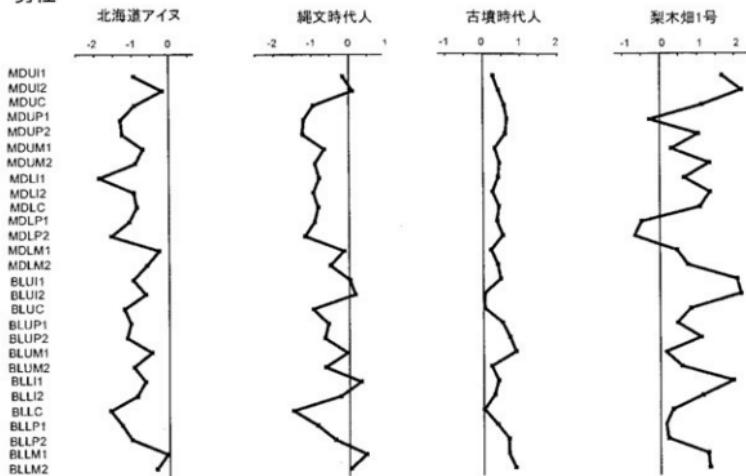
梨木畠1号人骨は、頭骨、歯、四肢骨の形態的特徴のいずれにおいても明らかに和人的である。頭骨では、顔面と眼窓が高く、鼻骨の幅が狭いなどがその特徴である。頭骨13計測項目（最大長、最大幅、最小前頭幅、バジオン・ブレグマ高、頬骨弓幅、上顎高、眼窓幅、眼窓高、前頭弦長、前頭垂線長、鼻骨弦長、鼻骨垂線長、頬上頸弦長）を用いたベンローズの形態距離分析の結果を表5に示したが、1号人骨は北海道アイヌや縄文時代人よりも東北現代人や古墳時代人に近い。東北現代人との距離が最も近いが、これは顎高が高いなどの現代的な特徴が反映されているものと思われる。

本州現代人を基準にした偏差折線により、歯の大きさの程度を比較した結果を図1に示した。男性では、北海道アイヌも縄文時代人も全体としてみれば本州現代人よりも歯は小さい傾向を示すが、逆

表5. ベンローズの形態距離

梨木畠1号頭蓋（男性）*	
東北現代人	0.79
古墳時代人	0.99
北海道アイヌ	1.08
縄文時代人	1.39
*13計測項目	
梨木畠2号頭蓋（女性）**	
北海道アイヌ	0.55
東北・関東現代人	0.70
縄文時代人	0.80
古墳時代人	0.81
**14計測項目	

男性



女性

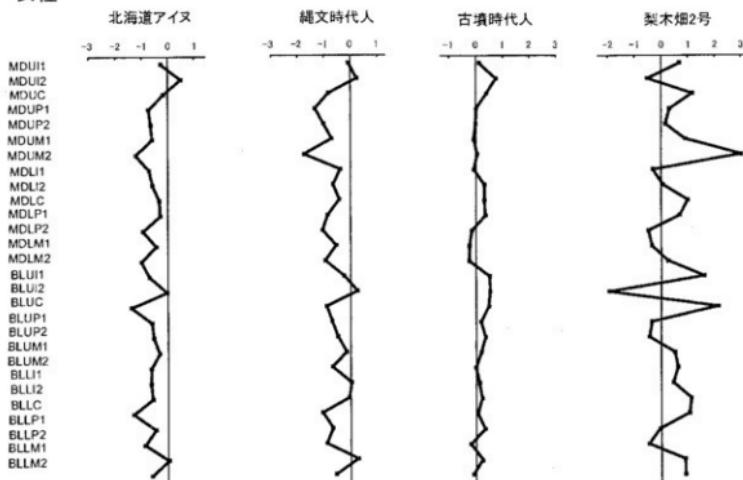


図1：歯冠近遠心径と頬舌径の本州現代人からの偏差折線。本州現代人、北海道アイヌ、縄文時代人、古墳時代人のデータは Matsumura (1995)より引用。

に古墳時代人の歯は本州現代人よりもやや大きい傾向を示している。梨木畑1号は1例のみであるので、基準線からの左右の振れが大きいが、それでも全体としてみれば明らかに現代本州人の歯よりも大きい傾向がみられ、北海道アイヌや縄文時代人とは異なる。上顎切歯に明らかなシャベル状形質が認められる点も和人的と評価されてしかるべきであろう。

四肢骨では、脛骨骨体が扁平でないこと、脛骨大腿骨示数が78.5程度しかないことが、アイヌや縄文人とは明らかに異なる点である。大腿骨と脛骨の長さから推定した身長は約162cmで、平本(1972)が推定した関東地方古墳時代人の平均身長163cmと大差がない。

結論としては、梨木畑1号男性人骨は明らかに和人であり、しかも東北地方や関東地方の古墳時代人よりもかなり現代化した頭骨特徴を有していたと考えてよいであろう。

梨木畑2号女性人骨の系統解析はかなり難しい。顔面がそれほど面長でなく、眼窓の高さも中等であり、しかも鼻骨の幅が広く湾曲も強いといったアイヌにも共通する特徴が認められる一方で、著明な歯槽性突頸が認められるなど古墳時代から中世にかけての和的な特徴も顕著に認められる。表5に示した頭骨計測値14項目（最大長、最大幅、最小前頭幅、バジオン・ブレグマ高、頬骨弓幅、上顎高、眼窓幅、眼窓高、鼻幅、鼻高、前頭弦長、前頭垂線長、鼻骨弦長、鼻骨垂線長）を用いたベンローズの形態距離の分析結果では、1号男性人骨とは異なり、北海道アイヌに最も近く、次いで東北・関東現代人に近い。歯槽性突頸など非アイヌ的特徴がみられるので、この結果を絶対視することはできないが、頭骨の観察結果からも、この距離計算の結果をある程度予測することはできた。

歯の大きさの程度を比較した偏差折線図である図1をみると、男性と同様、アイヌと縄文人は本州現代人よりも歯が小さい傾向を示し、古墳時代人は本州現代人とほぼ同等があるは僅かに大きい傾向を示している。梨木畑2号も1例のみの比較であるので、基準線からの左右の振れが大きいが、それでも全体としてみると、本州現代人の歯よりも大きい傾向を示すと見なしてよさそうである。この結果は、梨木畑2号人骨も歯の大きさからみれば、アイヌ、縄文人というよりは和人であることを物語っている。上顎切歯に明らかなシャベル形態が観察されることも、この結果を裏付けている。

四肢骨に関しては、脛骨骨体中央部が扁平でないことは和人的である。尺骨の長さから推定された身長149.3cmは、平本（1972）の関東地方の古墳時代人女性の平均推定身長152cmを若干下回っている。

結論としては、梨木畑2号人骨も基本的には和人と考えられるが、頭骨に認められたようなアイヌ的な要素の存在を無視することはできないということであろうか。この人骨の系統解析には今後さらに詳細な研究が必要である。

最後に梨木畑1号人骨と2号人骨の血縁関係について若干の問題提起をしておきたい。頭骨や歯、四肢骨の観察と記載を行っている際に、1号人骨と2号人骨に偶然とは考えられない幾つかの類似点が認められた。多くは客観的に表現できない直感的な類似点であるが、例えば、1号人骨の左上顎第1小白歯と2号人骨の左上顎側切歯の矮小化、下顎頭より遙かに高く突出する筋突起の形態、舌下神

経管二分を始めとしたいくつかの非計測的形態小変異の共有などがその具体例である。そこで同定に問題があった切歯を除外して、上顎・下顎の犬歯から第2大臼歯までの近遠心径と類舌径20項目を用いて、土肥・他（1986）に従って1号人骨と2号人骨間のQモード相関係数を算出したところ、相関係数は0.621となり、1%水準で意味のある正の相関があることが判明した。2m弱の距離において、東頭位・仰臥伸展位ではなく平行に埋葬された2体の人骨に何らかの血縁があったとしてもさして不思議ではない。今後DNA分析を含めた詳細な血縁推定の研究を試みる必要があると考えられる。

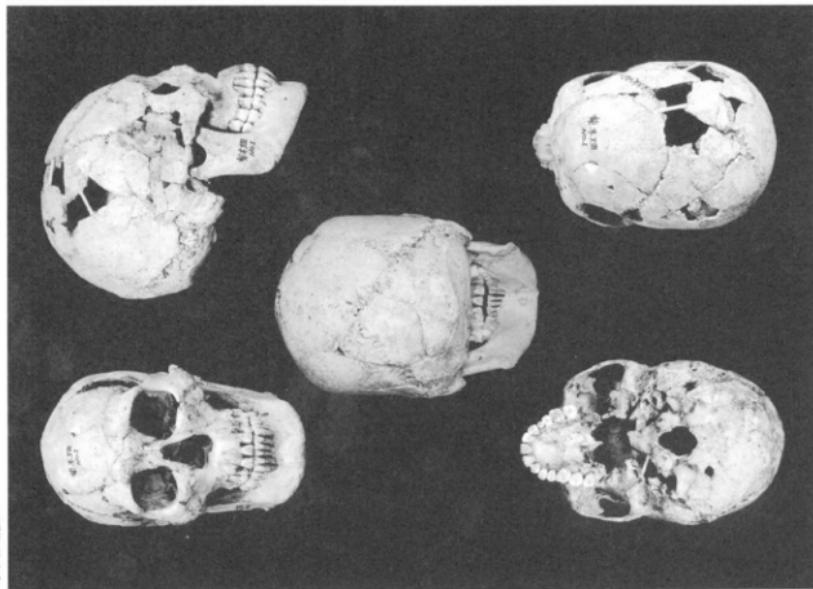
まとめ

- 1) 平成14年に梨木畠貝塚から古墳時代と推定される2体の人骨が検出された。
- 2) 1号人骨は成人男性で、身長は約162cm。形質は明らかに和人的であり、頭骨には現代的な特徴も認められた。
- 3) 2号人骨は成人女性で、身長は約149cm。基本的には和人の人骨と思われるが、アイヌ的な特徴も頭骨の一部に認められた。
- 4) 1号人骨と2号人骨には血縁関係が存在する可能性を示唆する形質の共有が観察された。

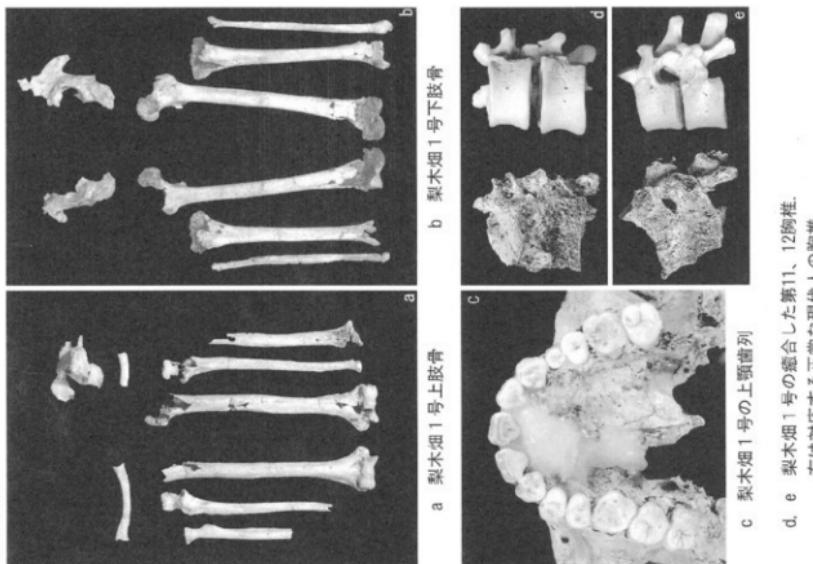
引用文献

- 土肥直美・田中良之・船越公威（1986）歯冠計測値による血縁者推定法と古人骨への応用。人類学雑誌、94：147-162。
- 藤井 明（1960）四肢長骨の長さと身長との関係について。順天堂大学体育学部紀要、3：49-61。
- 平本嘉助（1972）縄文時代から現代に至る関東地方人身長の時代的変化。人類学雑誌、80:221-236。
- Matsumura H (1995) A microevolutional history of the Japanese people as viewed from dental morphology. National Science Museum Monographs 9: 1-130.
- Yamaguchi B (1989) Limb segment proportions in human skeletal remains of the Jomon period. Bull. Natn. Sci. Mus., Tokyo, Ser D, 15: 41-48.

写真図版1



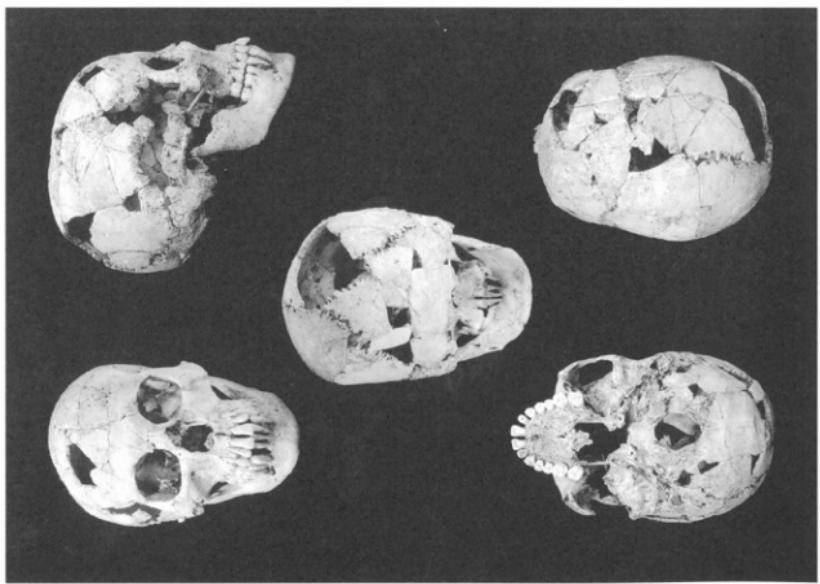
写真図版2



梨木烟1号男性頭骨

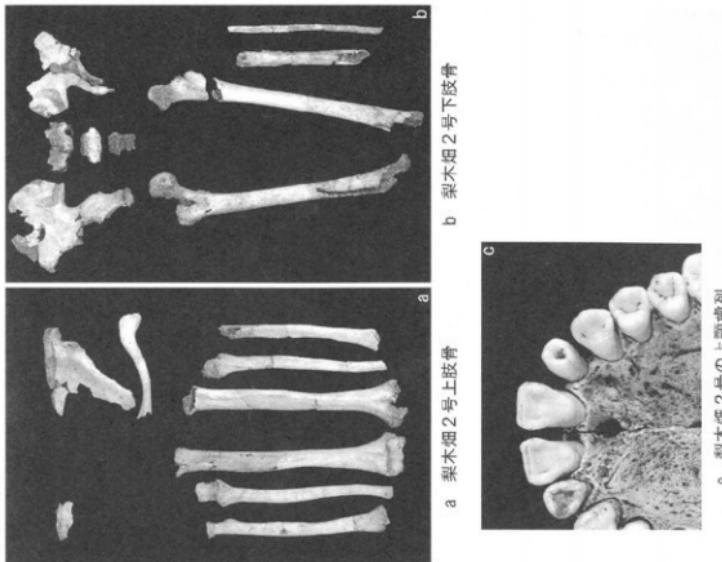
d, e 梨木烟1号の融合した第11、12胸椎
右は対応する正常な現代人の胸椎

写真圖版3



梨木塗2号女性頭骨

写真圖版4



a 梨木塗2号上肢骨
b 梨木塗2号下肢骨
c 梨木塗2号の上頸齒列

C 14 年代測定結果報告

（株）地球科学研究所

試料データ	未補正14C年代 (y BP) (measured radiocarbon age)	δ 13C (permil)	14C年代 (y BP) (Conventional radiocarbon age)
Beta-183797	1720 ± 40	-20.1	1800 ± 40

試料名 (23381) 1号人骨

測定方法、期間 AMS - Standard

試料種、前処理など bone collagen collagen extraction : with alkali

Beta-183798	1850 ± 40	-19.8	1940 ± 40
-------------	-----------	-------	-----------

試料名 (23382) 2号人骨

測定方法、期間 AMS - Standard

試料種、前処理など bone collagen collagen extraction : with alkali

年代値はRCYBP(1950 A.D.を0年とする)で表記。モダンリファレンススタンダードは国際的な慣例としてNBS Oxalic AcidのC14濃度の9.5%を使用し、半減期はリビーの5568年を使用した。エラーは1シグマ(68%確立)である。

報告内容の説明

未補正14C年代 : (同位体分別未補正) 14C年代 "measured radiocarbon age"

(y BP) 試料の $^{14}\text{C}/^{12}\text{C}$ 比から、単純に現在 (AD 1950年) から何年前 (BP) かを計算した年代。

14C年代 : (同位体分別未補正) 14C年代 "conventional radiocarbon age"

(y BP) 試料の炭素安定同位体比 ($^{13}\text{C}/^{12}\text{C}$) を測定して試料の炭素の同位体分別を知り

$^{14}\text{C}/^{12}\text{C}$ の測定値に補正值を加えた上で、算出した年代。

試料の ^{13}C 値を -25 (0/00) に基準化することによって得られる年代値である。

(Stuiver, M. and Polach, H.A. (1977) Discussion: Reporting of ^{14}C data. Radiocarbon, 19を参照のこと)

暦年代を得る際にはこの年代値をもちいる。

δ 13C (permil) : 試料の測定 $^{14}\text{C}/^{12}\text{C}$ 比を補正するための $^{13}\text{C}/^{12}\text{C}$ 比。

この安定同位体比は、下式のように標準物質(PDB)の同位体比からの千分偏差 (0/00) で表現する。

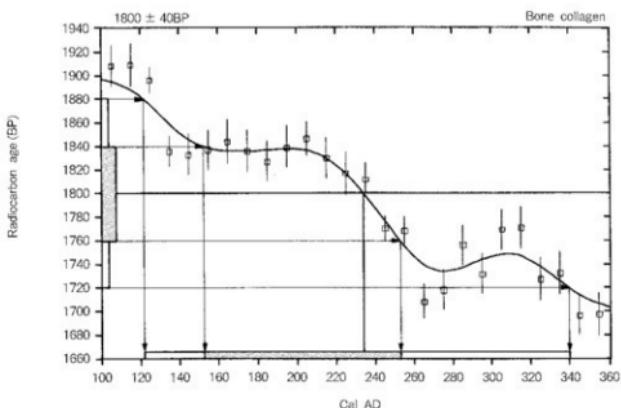
$$\delta \text{ 13C (0/00)} = \frac{(\text{13C}/\text{12C})[\text{試料}] - (\text{13C}/\text{12C})[\text{標準}]}{(\text{13C}/\text{12C})[\text{標準}]} \times 1000$$

ここで、 $^{13}\text{C}/^{12}\text{C}$ [標準] = 0.0112372 である。

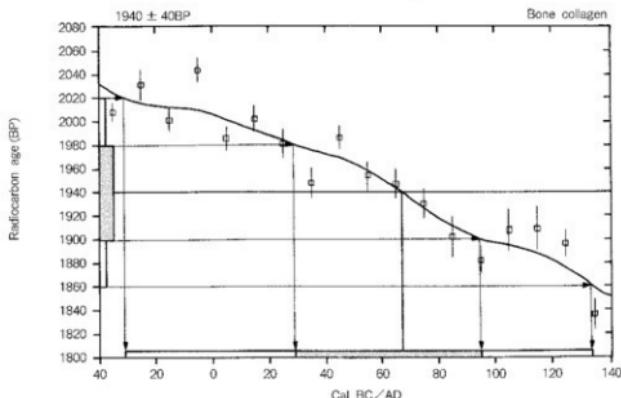
年 代 : 過去の宇宙線強度の変動による大気中¹⁴C濃度の変動に対する補正により、曆年代を算出する。具体的には年代既知の樹木年輪の¹⁴Cの測定、サンゴのU-Th年代と¹⁴C年代の比較により、補正曲線を作成し、曆年代を算出する。最新のデータベース("INTECAL98 Rediocardon Age Calibration" Stuiver et al., 1998, Radiocarbon 40(3))により約19000yBPまでの換算が可能となった。*

*但し、10000yBP以前のデータはまだ不完全であり今後も改善される可能性が高いので、補正前のデータの保管を推奨します。

1号人骨



2号人骨



VII. まとめ

1. サンファンパークアクセス道路関連調査地点は、近くに採石場があったことから、調査地点付近まで山があったと考えられ、この地点には、遺構・遺物等はなかったと思われる。
2. 市道付設に伴う調査地点は、A区の傾斜地からはピット群と縄文土器を検出し、傾斜の緩やかなB区では、縄文時代前期～晚期・弥生時代の土器や奈良・平安時代の土師器、須恵器が出土しているほかに、調査区ないで浅く不明瞭だが落ち込みを確認しており、住居跡があった可能性が考えられる。このことから、この地点から砂防ダム建設関連調査地点にかけて遺構・遺物が存在している可能性が考えられる。
3. 県道石巻鮎川線道路改良工事に伴う調査地点からは奈良・平安時代の住居跡3軒と溝跡1条、焼土遺構、製塙遺構などや古墳時代の土器集中地点の遺構が確認された。また、遺構外からは、縄文時代前期～晚期の土器、弥生土器、続縄文土器、骨角器、鉄製品などが出土している。
4. Bトレンチ西側で2体の人骨がほぼ全身確認された。人骨は製塙遺構の下層で確認され、人骨の頭部周辺に古墳時代前期の土器集中地点が確認されていることから、人骨は古墳時代前期であると考えられる。人骨はともに頭部が東側にあり、東西方向に埋葬されている。
5. BトレンチとCトレンチで確認された礫層の礫は、長軸が1.5～10cm、短軸が2～7cm、厚さが0.4～1.5cmの扁平な礫であり、礫が堆積しているのは主に遺構が確認された地点であることや扁平な礫が自然堆積したならば水平堆積するはずだが、直立するものも少なからず存在しているなど地形学的にも自然堆積であると考えるのは困難であると思われる。
6. BトレンチとCトレンチから層厚約10cm程の貝層を確認している。貝層はアサリ、ハマグリを中心としており、この他にカキなども含んでいる。また、貝層からは、土師器、須恵器の土器類とともに多くの骨角器が出土しており、骨角器は金属器で切断されたと思われることから、貝層は、奈良・平安時代のものと考えられる。

引用・参考文献

- 石巻市 1953：『石巻市史』1
- 石巻市史編纂委員会 1995：『石巻の歴史』7
- 石巻市教育委員会 1978：『石巻市文化財だより』7
- 石巻市教育委員会 2003：「梨木畠貝塚」『石巻市文化財調査報告書』第10集
- 石巻市教育委員会 2003：「新金沼遺跡」『石巻市文化財調査報告書』第11集
- 石巻市公民館 1964：『石巻周辺古代遺物展』「目でみる郷土シリーズ」1
- 伊東信雄 1981：「資料集・考古資料」『宮城県史』34
- 楠本政助 1973：「先史」『矢本町史』1
- 佐藤敏幸 1993：「闇ノ入遺跡」『河南町文化財調査報告書』7
- 東北大学考古学研究室 1982：『東北大学文学部考古学資料図録』
- 東北歴史資料館 1989：「仙台周辺の製塙遺跡」『研究紀要』第15巻
- 東北歴史資料館 1989：「宮城県の貝塚」『東北歴史資料館資料集』25
- 林 謙作 1968：「宮城県石巻市梨木畠貝塚」『日本考古学年報』16



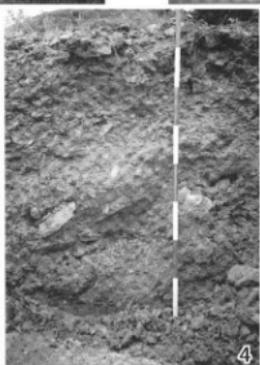
1



2



3



4



5



6



7



8

1 調査地点遠景（南→北）

2 調査地点近景

3 A₁地点完掘状況4 A₁地点断面5 A₂地点完掘状況

6 B地点近景

7 B地点完掘状況

8 B地点断面

サンファンパークアクセス道路関連調査地点



▲ 調査地点近景

▼ 調査区全景



▲ 北側トレンチ

▼ 南側トレンチ



▲ 北側トレンチ断面

▼ 南側トレンチ断面

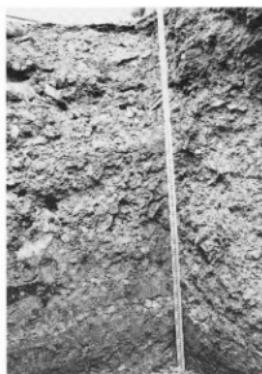


市道付設に伴う調査地点





Aトレンチ近景（東→西）



Aトレンチ断面



Bトレンチ第1号製塩遺構検出状況



Bトレンチ東 土壌・ピット完掘状況



第1号製塩遺構・人骨出土地点断面



人骨検出状況



第1号人骨検出状況



第1号人骨

県道石巻鶴川線道路改良工事関連調査地点



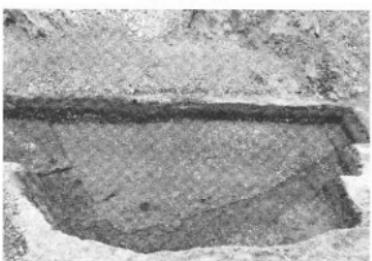
第2号人骨検出状況



第2号人骨



人骨出土・土器集中地点



第2号住居跡検出状況



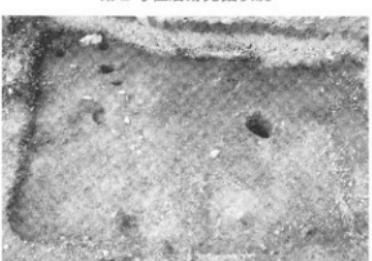
第2号住居跡遺物出土状況



第2号住居跡完掘状況



第3号住居跡検出状況



第3号住居跡完掘状況

県道石巻鶴川線道路改良工事関連調査地点



第4号住居跡検出状況



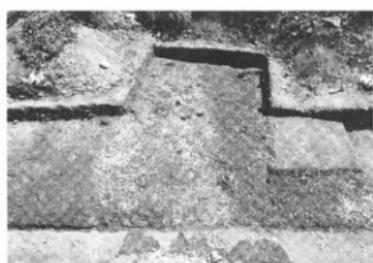
第4号住居跡完掘状況



焼土遺構



焼土遺構断面



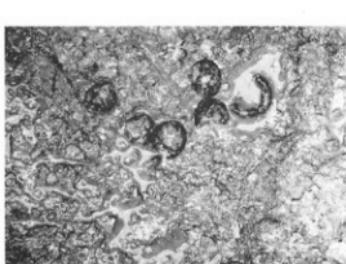
Cトレンチ溝跡検出状況



Dトレンチ断面

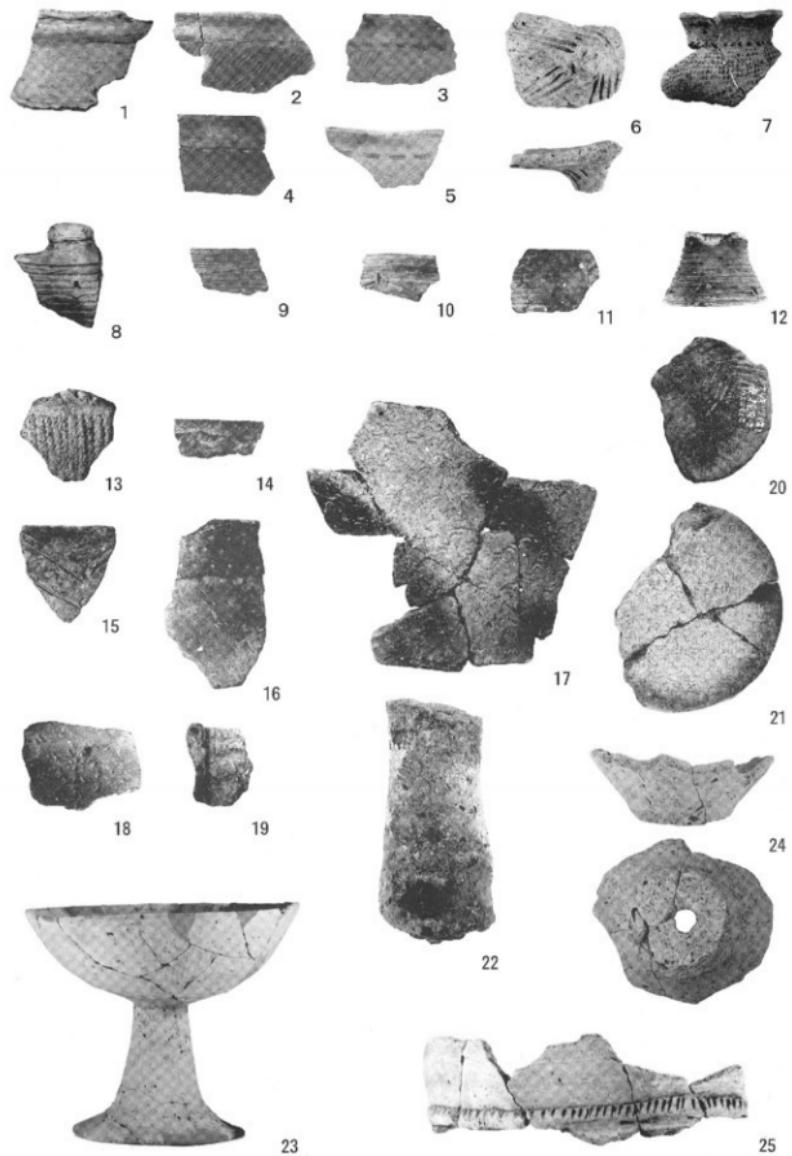


Dトレンチ溝跡断面



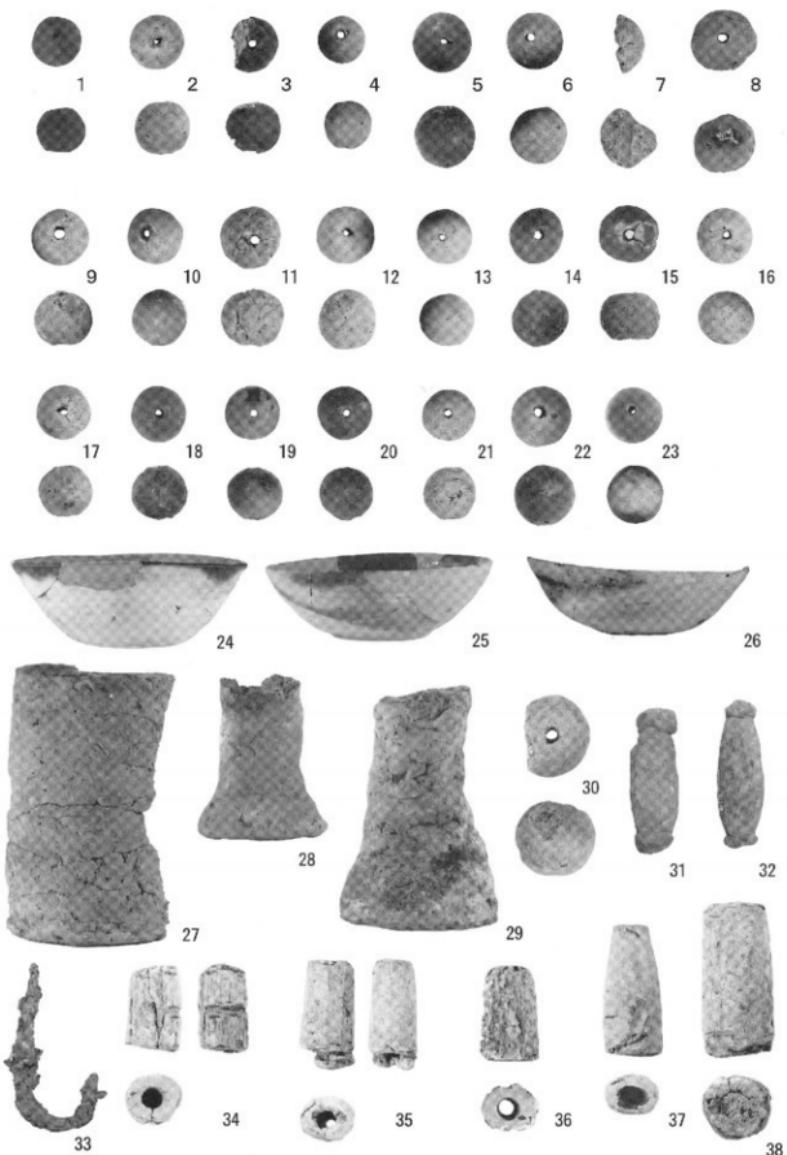
Dトレンチ出土 トチの実

県道石巻鰐川線道路改良工事関連調査地点



1~21 市道付設に伴う調査地点出土遺物
22 第1号製塩遺構出土遺物

23~25 Bトレンチ遺物集中地点出土遺物

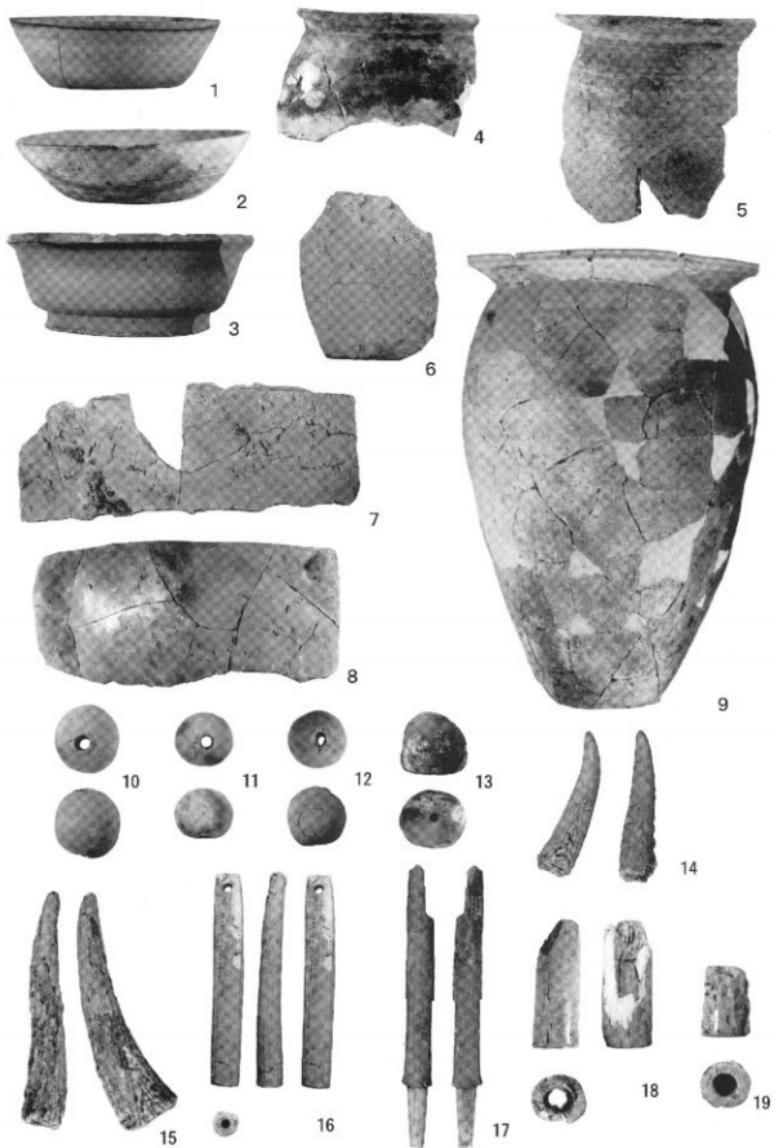


1~23 B トレンチ遺物集中地点出土遺物

24~38 B トレンチ出土遺物



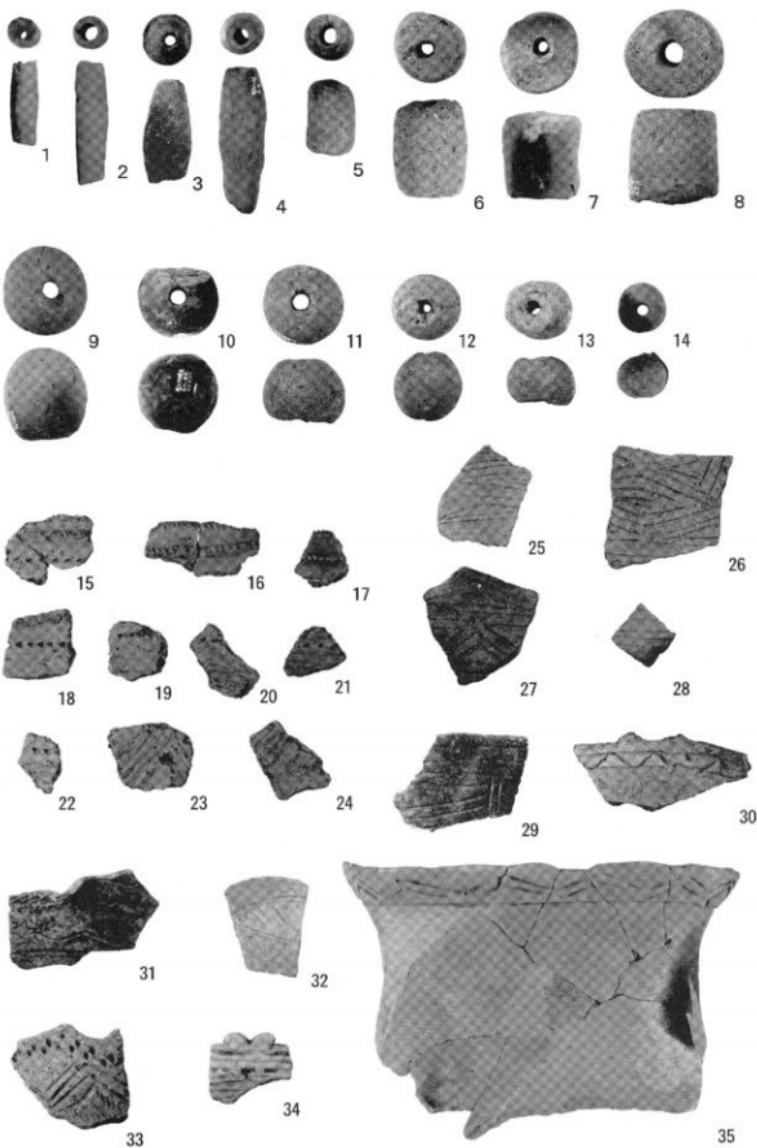
1~17 Bトレンチ出土遺物



1~19 第2号住居跡出土遺物



1~9 第3号住居跡出土遺物 10~19 第4号住居跡出土遺物 20~24 Cトレンチ出土遺物



1 ~ 35 C トレンチ出土遺物



1 ~14 C トレンチ出土遺物

15・16 D トレンチ出土遺物

報 告 書 抄 錄

ふりがな	なししきはたかいづか							
書名	梨木畠貝塚							
副書名	(主)石巻鮎川原田道路改良工事に伴う発掘調査報告書							
卷次								
シリーズ名	石巻市文化財調査報告書							
シリーズ番号	第12集							
編著者名	芳賀英実・木暮亮・今野勝成							
編集機関	石巻市教育委員会							
所在地	〒986-8501 宮城県石巻市日和が丘一丁目1番1号							
発行年月日	西暦2004年3月							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 (m ²)	調査原因
		市町村	遺跡番号					
なししきはたかいづか 梨木畠貝塚	いしのまきし 石巻市 わたしのはあざ 渡波字 なししきはた 梨木畠	4202	65002	38° 24' 38"	141° 22' 54"	2002.5.20 ~ 2002.11.22	約265m ²	県道改良 工事に伴 う事前調 査
所収遺跡名	種別	主な時代		主な遺構		主な遺物	特記事項	
梨木畠貝塚	集落跡 生産遺跡 土壙墓	古墳時代前期 奈良・平安時代		住居跡 製塩遺構 土壙墓		土師器 須恵器 製塙土器 土製支脚 骨角器 鉄製釣針 鉛帶金具		

石巻市文化財調査報告書第12集

梨木畑貝塚

—泉道石巻駅川徹道路改良工事に伴う発掘調査報告書—

2004(平成16)年3月15日発行

編 集 石巻市教育委員会

発 行 石巻市教育委員会

〒986-8501 宮城県石巻市日和が丘一丁目1番1号

☎0225-95-1111㈹

印 刷 株式会社 耕文社

〒986-0025 宮城県石巻市湊町一丁目5-7

☎0225-22-6505㈹

